

文献ID	町村	町No	編著者名	発行	書名、論文名	貝塚ID
34198403	佐原市	34	西村正衛	1984	千葉県香取郡佐原市大倉南貝塚、石器時代における利根川下流域の研究	II C3-02
34199001	佐原市	34	千葉県教育委員会	1990	下小野貝塚、千葉県記念物実態調査報告書II	II C2-06
34199501	佐原市	34	(財)千葉県文化財センター	1995	佐原市鶴崎貝塚発掘調査報告書	II C1-05
35189402	小見川町	35	八木榮三郎、下村三四吉	1894	下総国香取郡阿玉台貝塚探求報告, 東京人類学会雑誌97	II C3-17
35189601	小見川町	35	八木榮三郎、林若吉	1896	下総国香取郡阿玉台貝塚探求報告, 東京人類学会雑誌127	II C3-14
35192901	小見川町	35	大山史前学研究所	1929	千葉県良文村貝塚調査概報, 史前学雑誌1-5	II C3-16
35193001	小見川町	35	文部省	1930	千葉県良文村貝塚	II C3-16
35193003	小見川町	35	史跡名勝天然記念物保存協会	1930	良文村貝塚調査概報 史跡名勝天然記念物調査7	II C3-16
35193101	小見川町	35	大山柏	1931	下総香取郡神里村の貝塚, 史前学雑誌3-5	-
35193102	小見川町	35	大山柏	1931	白井貝塚採集の貝類・木内明神貝塚採集の貝類, 史前学雑誌3-5	II C3-14
35193102	小見川町	35	大山柏	1931	白井貝塚採集の貝類・木内明神貝塚採集の貝類, 史前学雑誌3-5	II C3-05
35195001	小見川町	35	池田次郎	1950	城台貝塚出土早期縄文土器の細別, 広島県立医科大学論文集2	II C3-04
35195101	小見川町	35	西村正衛	1951	千葉県香取郡白井通路貝塚の発掘略報, 古代1, 2	II C3-14
35195101	小見川町	35	西村正衛	1951	千葉県香取郡神里村白井雷貝塚発掘概報, 古代3	II C3-14
35195401	小見川町	35	西村正衛	1954	千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚(第2, 3次調査), 学術研究 人文・社会・自然3	II C3-14
35195402	小見川町	35	吉田格	1954	千葉県香取郡城ノ台北貝塚, 日本考古学年報2	II C3-04
35195501	小見川町	35	吉田格	1955	千葉県城ノ台貝塚, 石器時代1	II C3-04
35195502	小見川町	35	吉田格	1955	千葉県香取郡城ノ台貝塚, 日本考古学年報3	II C3-04
35195801	小見川町	35	和田哲	1958	鶴崎貝塚及び木之内貝塚発掘略報, 金鈴7	II C3-05
35196901	小見川町	35	西村正衛	1969	千葉県小見川町木之内明神貝塚(第1次調査), 学術研究 人文・社会・自然18	II C3-05
35197001	小見川町	35	西村正衛	1970	千葉県小見川町阿玉台貝塚, 学術研究 人文・社会・自然19	II C3-17
35197301	小見川町	35	齊木勝	1973	千葉県小見川町白井大宮台貝塚, 考古学雑誌59-1	II C3-14
35198401	小見川町	35	西村正衛	1984	千葉県香取郡小見川町木之内明神貝塚-縄文中期文化の研究-, 石器時代における利根川下流域の研究	II C3-05
35198402	小見川町	35	西村正衛	1984	千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚 石器時代における利根川下流域の研究	II C3-14
35198403	小見川町	35	西村正衛	1984	千葉県香取郡小見川町白井通路貝塚 石器時代における利根川下流域の研究	II C3-14
35198404	小見川町	35	西村正衛	1984	千葉県香取郡小見川町阿玉台貝塚 石器時代における利根川下流域の研究	II C3-17
35198405	小見川町	35	西村正衛	1984	千葉県香取郡小見川町内野貝塚 石器時代における利根川下流域の研究	II C3-08
35198601	小見川町	35	麻生優	1986	千葉県香取郡清水堆遺跡の調査概要, 日本考古学における層位論の基礎的研究	II C3-06
35198801	小見川町	35	小見川町教育委員会	1988	城ノ台北貝塚, 小見川町内遺跡群発掘調査報告書 1988-3	II C3-04
35199001	小見川町	35	小見川町教育委員会	1990	阿玉台貝塚, 小見川町内遺跡群発掘調査報告書 1989年度	II C3-17
35199201	小見川町	35	(財)千葉県文化財センター	1992	小見川町白井大宮台貝塚確認調査報告書	II C3-14
35199401	小見川町	35	小宮孟	1994	縄文人と一緒に埋められたイヌと幼猪, 中央博物館だより21	II C3-14
35199501	小見川町	35	岡本東三他	1995	城ノ台南貝塚発掘調査報告書 千葉大学考古学研究報告1	II C3-04
37190501	銚子市	37	坪井正五郎他	1905	銚子紀行(貝塚堀と海岸巡り), 東京人類学会雑誌233	II D1-01
37190601	銚子市	37	足立文太郎	1906	下総余山貝塚発見の人骨(雑報), 人類学雑誌21-11	II D1-01
37190901	銚子市	37	江見水蔭	1909	地中の秘密	II D1-01
37190902	銚子市	37	高島唯峰	1909	貝塚叢話, 考古学8-5	II D1-01
37194201	銚子市	37	酒詰伸男	1942	下総小川町貝塚発掘略報, 人類学雑誌57-11	II D1-02
37195201	銚子市	37	大場磐雄他	1952	千葉県銚子市粟島台石器時代遺跡調査報告, 上代文化22	II D1-02
37195301	銚子市	37	佐野大和、野口義磨	1953	千葉県余山貝塚, 日本考古学年報6	II D1-01
37195601	銚子市	37	銚子市史編纂委員会	1956	銚子市史	-
37196201	銚子市	37	酒詰伸男	1962	千葉県余山貝塚発掘調査概報(前篇), 人文学62	II D1-01
37196301	銚子市	37	酒詰伸男	1963	千葉県余山貝塚発掘調査概報(中篇), 文化学年報12	II D1-01
37196401	銚子市	37	酒詰伸男	1964	千葉県余山貝塚発掘調査概報(下篇), 文化学年報13	II D1-01
37197401	銚子市	37	寺村光晴、安藤文一	1974	粟島台遺跡-1973年度発掘調査概要	II D1-02
37198601	銚子市	37	國學院大学考古学資料館	1986	余山貝塚資料図譜	II D1-01
37198602	銚子市	37	原田昌幸	1986	余山貝塚出土人骨について, 余山貝塚資料図譜	II D1-01
37198901	銚子市	37	(財)千葉県文化財センター	1989	銚子市余山貝塚確認調査報告書	II D1-01
37199001	銚子市	37	粟島台遺跡発掘調査会	1990	千葉県銚子市粟島台遺跡発掘調査報告書	II D1-02
37199002	銚子市	37	銚子市教育委員会	1990	銚子市余山貝塚発掘調査報告書	II D1-01
37199101	銚子市	37	銚子市教育委員会	1991	千葉県銚子市粟島台遺跡発掘調査報告書	II D1-02
37199102	銚子市	37	(財)千葉県文化財センター	1991	銚子市余山貝塚	II D1-01
37199301	銚子市	37	(財)東総文化財センター	1993	千葉県銚子市仲有戸遺跡、佐野原北遺跡、荒野台遺跡、粟島台遺跡	II D1-02
40199801	千歳町	40	(財)千葉県文化財センター	1998	桜井平遺跡, 千歳工業団地埋蔵文化財発掘調査報告書	III A1-01
42194201	山田町	42	日本人類学会	1942	向油田, 人類学雑誌57-12	II C3-10
42195201	山田町	42	西村正衛	1952	千葉県香取郡八都村向油田貝塚発掘概報, 古代7・8	II C3-10

文献ID	町村	町No	編者著者名	発行	序名、論文名	貝塚ID
42196701	山田町	42	西村正衛	1967	千葉県香取郡向油田貝塚出土土器, 学術研究 人文・社会・自然 21	ⅡC3-10
42198201	山田町	42	山田町教育委員会	1982	山田町の文化財1	ⅡC3-10
42198401	山田町	42	西村正衛	1984	千葉県香取郡山田町向油田貝塚-縄文中期文化の研究-, 石器時代における利根川下流域の研究	ⅡC3-10
44196501	多古町	44	清水潤三	1965	千葉県香取郡大原内貝塚, 日本考古学年報13	ⅢA2-23
44196601	多古町	44	清水潤三	1966	多古町南玉造貝塚, 日本考古学年報14	ⅢA2-21
44198701	多古町	44	多古町遺跡調査会	1987	千葉県多古町境遺跡発掘調査報告	ⅢA2-27
45197901	芝山町	45	芝山町教育委員会	1979	千葉県山武郡芝山町境遺跡発掘調査報告書第3・4・5地点	ⅢA2-27
45198001	芝山町	45	芝山町教育委員会	1980	千葉県山武郡芝山町境遺跡発掘調査報告書第Ⅰ・Ⅱ地点	ⅢA2-27
45198701	芝山町	45	芝山町教育委員会	1987	千葉県芝山町下吹入遺跡群	ⅢA2-27
45199201	芝山町	45	芝山町教育委員会	1992	芝山町史 資料集1 原始・古代編	-
45199501	芝山町	45	(財)山武郡市文化財センター	1995	居合台遺跡	ⅢA2-30
45199501	芝山町	45	芝山町教育委員会	1995	芝山町史 通史上	-
46195701	八日市場市	46	清水潤三・近森正	1957	千葉県八日市場市宿井戸貝塚の調査, 史学32-2	ⅢA2-05
46195801	八日市場市	46	清水潤三	1958	千葉県栗山川渓谷における貝塚の地域的研究予報, 史学31-1	ⅢA2-17
46195801	八日市場市	46	清水潤三	1958	千葉県栗山川渓谷における貝塚の地域的研究予報, 史学31-1	ⅢA2-05
46195801	八日市場市	46	清水潤三	1958	千葉県栗山川渓谷における貝塚の地域的研究予報, 史学31-1	ⅢA2-06
46195901	八日市場市	46	清水潤三	1959	千葉県八日市場市八辺貝塚, 日本考古学年報8	ⅢA2-06
46196101	八日市場市	46	慶應義塾高校歴史研究会	1961	大浦貝塚発掘報告, アーケオロジー-27	ⅢA2-09
46196301	八日市場市	46	清水潤三	1963	千葉県八日市場市宿井下貝塚, 日本考古学年報10	ⅢA2-05
46196302	八日市場市	46	清水潤三	1963	千葉県八日市場市飯高貝塚, 日本考古学年報10	ⅢA2-17
46196501	八日市場市	46	鈴木公雄	1965	千葉県八日市場市久方貝塚の晩期縄文土器に就いて, 史学38-1	ⅢA2-04
46196502	八日市場市	46	慶應義塾高校歴史研究会	1965	千葉県八日市場市吉田久方貝塚発掘調査報告	ⅢA2-04
46196601	八日市場市	46	清水潤三	1966	千葉県八日市場市大浦貝塚, 日本考古学年報14	ⅢA2-09
46196901	八日市場市	46	鈴木公雄	1969	千葉県八日市場市久方貝塚, 日本考古学年報17	ⅢA2-04
46197101	八日市場市	46	清水潤三	1971	千葉県八日市場市高市遺跡(貝塚), 日本考古学年報19	ⅢA2-08
46197201	八日市場市	46	清水潤三・藤村東男	1972	千葉県八日市場市松山高市貝塚の調査について, 史学45-2	ⅢA2-08
46197401	八日市場市	46	慶應義塾大学考古学研究会	1974	千葉県栗山川流域の貝塚, ストーンサークル	ⅢA2-07
46198201	八日市場市	46	清水潤三他(再掲)	1982	八辺貝塚, 八日市場市史上巻	ⅢA2-06
46198202	八日市場市	46	清水潤三・近森正他(再掲)	1982	吉田・宿井戸貝塚, 八日市場市史上巻	ⅢA2-05
46198203	八日市場市	46	清水潤三他(再掲)	1982	飯高貝塚, 八日市場市史上巻	ⅢA2-17
46198204	八日市場市	46	広瀬治男	1982	陣礎・大浦貝塚, 八日市場市史上巻	ⅢA2-09
46198205	八日市場市	46	藤村東男・岡本孝之	1982	豊栄・久方貝塚, 八日市場市史上巻	ⅢA2-04
46198206	八日市場市	46	清水潤三・藤村東男(再掲)	1982	陣礎・松山高市貝塚, 八日市場市史上巻	ⅢA2-08
46198207	八日市場市	46	桜井茂隆	1982	縄文時代, 八日市場市史上巻	-
49195401	横芝町	49	清水潤三	1954	千葉県山武郡鴻ノ巣貝塚, 日本考古学年報5	ⅢA2-32
49195801	横芝町	49	清水潤三	1958	千葉県山武郡牛熊貝塚, 日本考古学年報7	ⅢA2-31
49196101	横芝町	49	清水潤三	1961	千葉県山武郡姥山(台)貝塚, 日本考古学年報9	ⅢA2-38
49196102	横芝町	49	慶應義塾高校歴史研究会	1961	木戸台貝塚発掘報告, アーケオロジー-27	ⅢA2-35
49196401	横芝町	49	清水潤三	1964	千葉県山武郡木戸台貝塚, 日本考古学年報12	ⅢA2-35
49196402	横芝町	49	清水潤三	1964	千葉県山武郡姥山・台貝塚, 日本考古学年報12	ⅢA2-38
49196501	横芝町	49	清水潤三	1965	千葉県山武郡姥山遺跡, 日本考古学年報13	ⅢA2-38
49196701	横芝町	49	清水潤三	1967	千葉県山武郡鴻ノ巣貝塚, 日本考古学年報15	ⅢA2-32
49196801	横芝町	49	鈴木公雄	1968	千葉県山武郡姥山遺跡, 日本考古学年報	ⅢA2-38
49197201	横芝町	49	藤村東男	1972	千葉県山武郡姥山遺跡(第五次調査), 日本考古学年報20	ⅢA2-38
49197501	横芝町	49	清水潤三	1975	横芝町の古代文化, 横芝町史	-
49198701	横芝町	49	(財)千葉県文化財センター	1987	中台貝塚, 主要地方道成田松尾線5	ⅢA2-37
49198901	横芝町	49	(財)千葉県文化財センター	1989	横芝町山武貝塚確認調査報告書	ⅢA2-38
49199001	横芝町	49	北長山野遺跡調査会	1990	東・北長山野遺跡	ⅢA2-40
49199201	横芝町	49	渡辺修一	1992	横芝町山武姥山貝塚出土の縄文晩期浮線土器群, 研究連絡誌35	ⅢA2-38
49199301	横芝町	49	小宮孟	1993	千葉県山武郡姥山貝塚の上層堆積物から水洗分離した動物遺存体 千葉県立中央博物館研究報告 人文科学2(2)	ⅢA2-38
5119○	松尾町	51	○	○	松尾町埋蔵文化財調査報告Ⅰ	ⅢA2-41
52196401	山武町	52	清水潤三	1964	武勝貝塚, 日本考古学年報12	ⅢA3-05
52196501	山武町	52	清水潤三	1965	観音谷貝塚, 日本考古学年報13	ⅢA3-04
54197501	東金市	54	東金市史編纂委員会	1975	東金市史 史料編1	-
54199601	東金市	54	(財)山武郡市文化財センター	1996	羽戸遺跡B地区, 山武郡市文化財センター年報11	ⅢA5-05
56198402	大網白里町	56	伊藤一男	1984	山武郡大網白里町上貝塚の発掘調査 九十九里総合文化研究所研究紀要1	ⅢA5-08
56198501	大網白里町	56	大網白里町史編さん室	1985	上貝塚発掘調査報告書	ⅢA5-08
56198601	大網白里町	56	小高春雄	1986	縄文時代, 大網白里町史	-
56198701	大網白里町	56	(財)千葉県文化財センター	1987	杏垣貝塚	ⅢA5-04
57198901	白子町	57	小高春雄	1989	白子町塚ノ間貝塚について, 竹筥6	ⅢA5-12

文献ID	町村	町No	編著者名	発行	書名、論文名	貝塚ID
59193701	茂原市	59	篠崎四郎	1937	上総国下太田貝塚, 先史考古学1-2	ⅢA6-02
59196701	茂原市	59	川戸彰	1967	千葉県茂原市石神貝塚, 日本考古学年報15	ⅢA6-04
59197201	茂原市	59	川戸彰	1972	千葉県長生郡下太田貝塚(第二次調査), 日本考古学年報20	ⅢA6-02
59199701	茂原市	59	千葉県教育委員会	1997	茂原市渋谷貝塚発掘調査報告書	ⅢA6-01
59199901	茂原市	59	菅谷通保	1999	下太田貝塚, 平成10年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨	ⅢA6-02
61199001	長南町	61	(財)長生郡市文化財センター	1990	岩川・今泉遺跡	ⅢA6-03
63193701	一宮町	63	大山栢・池上啓介・大給尹	1937	千葉県一宮町貝塚貝塚調査報告, 史前学雑誌9-5	ⅢA7-01
63195401	一宮町	63	清水潤三	1957	千葉県長生郡一ノ宮貝塚, 日本考古学年報5	ⅢA7-01
65197501	大原町	65	大原町文化財審議委員会	1975	新田野貝塚	ⅢB1-01
68192501	勝浦市	68	山崎直方	1925	上総守谷洞窟に於ける史前時代の遺跡に就きて, 人類学雑誌40-3	ⅢB2-04
68192701	勝浦市	68	増井経夫	1927	編鰐穴, 上総興津町附近自然洞穴発掘報告, 考古学雑誌17-12	ⅢB2-01
68192702	勝浦市	68	増井経夫	1927	本寿寺洞穴, 上総興津町附近自然洞穴発掘報告, 考古学雑誌17-12	ⅢB2-03
75195401	三芳村	75	三芳村	1954	三芳村史	I E5-02
78195501	館山市	78	江坂輝彌	1955	千葉県館山市那古稲原貝塚, 日本考古学年報3	I E5-01
78195801	館山市	78	平野元三郎、金子浩昌	1958	館山市鉾切洞穴	I E6-02
78197101	館山市	78	館山市史編さん室	1971	館山市史	
78199301	館山市	78	千葉大学考古学研究室	1993	館山市大寺山洞穴測量調査概報	I E5-05
78199401	館山市	78	千葉大学考古学研究室	1994	館山市大寺山洞穴第1次調査概報	I E5-05
78199501	館山市	78	千葉大学考古学研究室	1995	館山市大寺山洞穴第2次調査概報	I E5-05
78199602	館山市	78	千葉大学考古学研究室	1996	館山市大寺山洞穴第3・4次調査概報	I E5-05
78199701	館山市	78	千葉県教育委員会	1997	館山市大寺山洞穴遺跡発掘調査報告書	I E5-05
78199801	館山市	78	千葉大学考古学研究室	1998	館山市大寺山洞穴第5次調査概報	I E5-05

広域

文献ID	町村	町No	編著者名	発行	書名、論文名	キーワード
99189001	全国	99	小金井良精	1890	本邦貝塚ヨリ出タル人骨ニ就テ, 人類学雑誌6-2	人類
99189201	関東	99	若林勝邦	1892	余ガ発見セシ下総、常陸ノ貝塚, 東京人類学雑誌72	地名表
99190701	全国	99	足立文太郎	1907	本邦石器時代住民の頭蓋, 人類学雑誌22-6	人類
99190702	全国	99	Neal Gordon Munro	1907	後石器時代之頭蓋骨, 人類学雑誌22-8	人類
99190801	全国	99	Neal Gordon Munro	1908	Prehistoric Japan	貝塚・生業
99191101	関東	99	K. Kisinoue(岸上鎌吉)	1911	Prehisitoric Fishing in Japan, 東京帝国大学農科大学紀要2-7	貝塚・生業
99191801	全国	99	小金井良精	1918	日本石器時代人ニ上犬歯を抜き去る風習ありしことに就て, 人類学雑誌33-2	人類
99192001	全国	99	松本彦七郎	1920	二三石器時代に於ける抜歯風習の有無及様式に就いて, 人類学雑誌35	人類
99192301	全国	99	小金井良精	1923	日本石器時代人の埋葬状態, 人類学雑誌38-1	人類
99192302	全国	99	小金井良精	1923	日本石器時代人の歯牙を變形する風習に就ての追加, 人類学雑誌38-6	人類
99192303	全国	99	長谷部言人	1923	石器時代人の抜歯に就て 第二, 人類学雑誌38-6	人類
99192501	全国	99	清野謙次	1925	日本原人の研究	人類
99192701	全国	99	長谷部言人	1927	石器時代の死産児埋葬, 人類学雑誌42-8	人類
99193801	全国	99	鈴木尚	1938	日本石器時代人骨の利器による損傷に就て, 人類学雑誌53-7	人類
99193901	全国	99	長谷部言人	1939	明治廿六年以前に採集された貝塚人骨, 人類学雑誌54-12	人類
99194001	全国	99	鈴木尚	1940	又状犬歯の新資料とその埋葬状態に就て, 人類学雑誌55-11	人類
99194002	全国	99	三宅宗悦	1940	日本石器時代の埋葬, 人類学先史学講座15	人類
99194301	関東	99	江坂輝弥	1943	南関東新石器時代貝塚より観たる沖積世に於ける海進海退, 古代文化14	古環境
99194401	全国	99	鈴木尚	1944	加工せる二個の石器時代人大腿骨に就て, 人類学雑誌59-1	人類
99194801	関東	99	酒誌仲男	1948	石器時代の東京湾のハイガイ, 人類学雑誌60-2	古環境
99195501	千葉県	99	酒誌仲男	1955	千葉県下の高々距貝塚群について, 菅田高田貝塚	貝塚・生業
99195601	全国	99	吉田義昭	1956	甕棺と思われる縄文文化中期の土器群, 石器時代3	人類
99195801	全国	99	坂詰秀一	1958	縄文文化における甕棺研究の前提, 銅鐸14	人類
99195802	全国	99	鈴木尚	1958	石鏃が嵌入した先史時代人骨盤, 人類学雑誌66-3(別刷)	人類
99195803	I区	99	伊藤和夫	1958	貝塚より見た千葉県附近の海進海退, 古代28	古環境
99195804	IE・ⅢB	99	山岡俊明・山口恭民	1958	安房郡遺跡地名表, 館山市鉾切洞穴	地名表
99195901	全国	99	酒誌仲男	1959	日本貝塚地名表	地名表
99195902	千葉県	99	伊藤和夫	1959	千葉県の石器時代文化, 千葉県石器時代遺跡地名表	県概要
99195903	千葉県	99	金子浩昌	1959	石器時代の漁撈活動, 千葉県石器時代遺跡地名表	県概要
99196001	II区	99	西村正衛	1960	利根川下流域における縄文中期文化の地域的研究(予報), 古代34	県概要
99196101	全国	99	坂詰秀一	1961	日本石器時代墳墓の類型的研究, 日本考古学研究	人類
99196102	II区	99	滝口宏	1961	印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査(本編)	県概要

第6節 千葉県文化財センター所有貝類標本

1. 当センター所有の貝類標本と最近行った貝類の同定について

貝塚出土貝類の種名を報告するに当たっては、本来、同定記載（同定の根拠を示すもの。標本・図鑑との一致点、他の分類群との相違点など）を示す必要がある。しかし、当センターの最近の報告ではこれを省略してきた。その理由の一つは、魚骨などに比べて、貝類の同定は比較的手続きが単純で誤りが出にくいことにある。もう一つは、報告書単位で個々に示すより、同定に使用した標本を何かの機会にまとめて示す方が今後の研究に有効であり、同定を実施する機関としての責任も果たせると考えていたからである。

今回提示する貝類標本は、千葉市有吉北貝塚から出土した貝塚産標本を基本として、その後の貝塚の整理で出土した貝塚産標本、県内の海岸で収集した現生標本を追加していったものである。収集の基準は、「千葉県内の貝塚で出土する可能性のある種」である。最近、当センターの職員が貝類の同定作業を行う際には、この標本を持ち出して利用し、未登録の貝種を追加するようにしている。

2. 貝類標本リストと写真図版

- (1) 今回取り上げるのは基本的には貝塚産標本のみとし、現生標本はとくに参考としたい場合に限った。
- (2) 標本コードは「綱-科-種」を示す。科までは「貝類標本分類コード」表のとおり分類学的配列による。種についても、なるべく近縁種に近いNoになるようにしたが、完全ではない。写真図版は種のコード順にこだわらず、近縁種や形態の似た種が見やすいように配置した。
- (3) 貝塚産標本は千葉市有吉北貝塚のほかに、以下の遺跡の資料を加えていった。カッコ内の当センター職員が同定を行い、その後西野が一部再検討を行った。また、疑問のあるものの一部については、以前千葉県立中央博物館黒住耐二氏に御指導を受けたが、最終的な確認はお願いしていない。

千葉市有吉北貝塚	縄文中期（西野1998）
千葉市谷津台貝塚	縄文前期（小宮1983）
千葉市高沢遺跡	古墳後期～奈良（関口1990）
小見川町白井大宮台貝塚	縄文中期（西野1991）
袖ヶ浦市山野貝塚	縄文後期（西野1992）
野田市東金野井貝塚	縄文後期（西野1993）
流山市上新宿貝塚	縄文後・晩期（西野1994）
流山市上貝塚	縄文後・晩期（岡田1996）
流山市三輪野山貝塚	縄文後・晩期（整理作業中）
市原市草刈六ノ台遺跡	縄文早期・弥生（西野1993）
横芝町中台貝塚	縄文中・後期（小宮1987）

- (4) 同定にあたっては以下の図鑑を参考にした。文章中では『』内の略称を使った。学名や和名などに違いがあるときはこの順に優先して採用した。

- A 奥谷喬司他1986『決定版生物大図鑑 貝類』世界文化社 …… 『世界文化社』
 B 波部忠重・奥谷喬司『学研生物図鑑 貝I』学研 …… 『学研』
 波部忠重・奥谷喬司『学研生物図鑑 貝II』学研 …… 『学研』
 C 吉良哲明『原色日本貝類図鑑』保育社 …… 『保育社』
 波部忠重『続原色日本貝類図鑑』保育社 …… 『保育社』

(5) 写真は原寸を原則とし、異なる場合はカッコ内に縮尺を示した。

(6) 写真の下に記載した解説は上記の図鑑のほかに以下の文献を参考にした。

黒住耐二・岡本正豊1994『千葉縣市原市の貝類 ー市原市自然環境実態調査報告書1994年3月』

高安克己・漆戸尊子・奥出不二生1984『日本産シジミ3種の殻体の比較形態学』

沼田眞・風呂田利夫1997『東京湾の生物誌』築地書館

藤原次男1982「汽水域で採集されたマシジミ」日本水産学会誌48-1

間嶋隆一1987「日本産ツメタガイ類（腹足類：タマガイ科）の分類」VENUS46-2

Machiko Yamada 微小貝ホームページの” Database”

(7) 標本は当センター中央調査事務所千葉調査室で保管している。

3. 貝類の同定作業について

図鑑類のみを使って貝塚の貝の種を決めるのは危険である。図鑑に示された写真は、ある程度のサイズに成長した1個の代表例でしかなく、解説文も他種との識別を行うための主な特徴、ポイントといったものに過ぎない。われわれの経験でも、図鑑に従えば間違った同定をしてしまうと考えられるケースは多い。しかし、これは図鑑が悪いのではなく、図鑑類のもつ限界によるものである。図鑑に載っている写真に似ている、といったことで種名を限定するのは明らかな誤りである。とくに、貝塚の貝はほとんどが色の特徴を残していないこと、破片や表面が劣化しているものが多いことなどの不利な条件がある。

ではどうすればよいのか。相談を受けたときは、図鑑やすでに整備された標本を参考にして、出土した貝種について残りの良い個体を取り出し、標本を整備することを勧めている。破片の同定、どこまで残っていれば1個と数えるか、などの作業は手元に標本を置いて始めるべきである。また、使用した標本について、および、少しでも疑問のあるものについて専門家や詳しい人に相談することも必要である。

なお、同定作業の基本的な考え方については、樋泉岳二1994「遺跡産魚骨同定の手引き(I)：同定の考え方と手順」動物考古学2に詳しい。

今回あえて図鑑に類する形を採用したのは、千葉県内の貝塚で出土する貝種を対象を絞れば、一般の図鑑よりは便利なものができるのではないかと考えたからである。繰り返し出る貝種ほど、正しく同定し、その出土の意味（漁場、資源量、食材としての価値、漁法など）を正しく知りたい。生物学等の研究者に相談しながら、今後もこのような目的で標本の充実を図っていきたい。

第69表 貝類標本一覧

PL.	写真	コードNo	和名	学名	目名	科名
1	1	III-A03-01	マダカアワビ	<i>Haliotis madaka</i>	原始腹足目	ミミガイ科
	2	III-A08-01	ツボミガイ	<i>Patelloida pygmaea lampanicola</i>	原始腹足目	ユキノカサガイ科
	3	III-A12-11	インダタミガイ	<i>Monodonta labio forma confusa</i>	原始腹足目	ニシキウズガイ科
	4	III-A12-21	イボキサゴ	<i>Umbonium (Suchium) moniliferum</i>	原始腹足目	ニシキウズガイ科
	5	III-A12-22	キサゴ*	<i>Umbonium costatum</i>	原始腹足目	ニシキウズガイ科
	6	III-A12-23	ダンベイキサゴ	<i>Umbonium (Suchium) giganteum</i>	原始腹足目	ニシキウズガイ科
	7	III-A12-31	クボガイ	<i>Chlorostoma lischkei</i>	原始腹足目	ニシキウズガイ科
	8	III-A12-32	コシダカガンガラ	<i>Omphalius rustcus</i>	原始腹足目	ニシキウズガイ科
2	9	III-A15-01	スガイ	<i>Lunella coronata coreensis</i>	原始腹足目	リュウテンサザエ科
	10	III-A15-03	サザエ	<i>Batillus cornutus</i>	原始腹足目	リュウテンサザエ科
	11	III-A17-02	ヒロクチカノコガイ	<i>Dostia violacea</i>	原始腹足目	アマオブネガイ科
	12	III-B05-01	オオタニシ	<i>Cipangopaludina japonica</i>	中腹足目	タニシ科
	13	III-B05-02	マルタニシ	<i>Cipangopaludina chinensis laeta</i>	中腹足目	タニシ科
	14	III-B09-01	タマキビガイ	<i>Littorina brevicula</i>	中腹足目	タマキビガイ科
	15	III-B23-01	オオヘビガイ	<i>Serpulorbis imbricatus</i>	中腹足目	ムカデガイ科
	16	III-B25-01	カワニナ	<i>Semisulcospira libertina</i>	中腹足目	カワニナ科
3	17	III-B28-01	フトヘナタリガイ	<i>Cerithidea rhizophorarum</i>	中腹足目	ウミニナ科
	18	III-B28-02	ヘナタリガイ	<i>Cerithideopsis cingulata</i>	中腹足目	ウミニナ科
	19	III-B28-03	カワアイガイ	<i>Cerithideopsis djadjariensis</i>	中腹足目	ウミニナ科
	20	III-B28-04	ホソウミニナ*	<i>Batillaria cumingii</i>	中腹足目	ウミニナ科
	21	III-B28-05	ウミニナ	<i>Batillaria multiformis</i>	中腹足目	ウミニナ科
	22	III-B28-06	イボウミニナ	<i>Batillaria zonalis</i>	中腹足目	ウミニナ科
	23	III-B32-01	カニモリガイ	<i>Proclava kochii</i>	中腹足目	オニノツノガイ科
4	24	III-B48-01	ツメタガイ	<i>Glassaulax didyma</i>	中腹足目	タマガイ科
	25	III-B48-03	ネコガイ	<i>Eunaticina papilla</i>	中腹足目	タマガイ科
	26	III-B53-01	オミナエシダカラガイ	<i>Erosaria boivini</i>	中腹足目	タカラガイ科
	27	III-B53-02	キイロダカラガイ	<i>Monetaria moneta moneta</i>	中腹足目	タカラガイ科
	28	III-B53-03	ハナヒラタカラガイ	<i>Monetaria (Ornamentaria) annulus</i>	中腹足目	タカラガイ科
	29	III-B53-04	ホシキヌタガイ	<i>Ponda (Mystaponda) vitellus</i>	中腹足目	タカラガイ科
5	30	III-B54-01	ボウシュウボラ	<i>Charonia sauliae sauliae</i>	中腹足目	フジツガイ科
	31	III-B54-02	カコボラ	<i>Monoplex parthenopeum echo</i>	中腹足目	フジツガイ科
	32	III-C01-01	アカニシ	<i>Rapana venosa</i>	新腹足目	アクキガイ科
	33	III-C01-02	イボニシ	<i>Thais (Reishia) clavigera</i>	新腹足目	アクキガイ科
	34	III-C01-03	レイシガイ	<i>Thais (Reishia) clavigera</i>	新腹足目	アクキガイ科
	35	III-C01-99	アクキガイ科種不明	Muricidae gen. & sp. indet.	新腹足目	アクキガイ科
	36	III-C03-02	マルテンスマツムシガイ	<i>Indomitrella martensi</i>	新腹足目	タモトガイ科
	37	III-C04-01	アラムシロガイ	<i>Reticunassa festiva</i>	新腹足目	ムシロガイ科
	38	III-C04-02	ムシロガイ	<i>Niotha livescens</i>	新腹足目	ムシロガイ科
	6	39	III-C05-01	バイ	<i>Balytonia japonica</i>	新腹足目
40		III-C07-01	テングニシ	<i>Hemifusus tuba</i>	新腹足目	テングニシ科
41		III-C17-02	コロモガイ	<i>Sydaphera spengleriana</i>	新腹足目	コロモガイ科
42		III-C19-01	サヤガタイモガイ	<i>Virroconus fulgetrum</i>	新腹足目	イモガイ科
43		III-C19-02	ハルシャガイ	<i>Lithoconus tessulatus</i>	新腹足目	イモガイ科
44		III-C20-02	ヒメトクサガイ	<i>Brevimyrella japonica</i>	新腹足目	タケノコガイ科
45		IV-A01-01	マキギヌガイ	<i>Actaeopyramis eximia</i>	腸紐目	トウガタガイ科
46		IV-B01-01	オオシイノミガイ	<i>Acteon sieboldii</i>	頭楯目	オオシイノミガイ科
47		VI-B01-01	ツノガイ	<i>Antalis weinkauffi</i>	ツノガイ目	ツノガイ科
48		VI-B01-02	ヤカドツノガイ	<i>Dentalium (Paradentalium) octangulatum</i>	ツノガイ目	ツノガイ科

PL.	写真	コードNo	和名	学名	目名	科名
7	49	VII-C01-01	ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i>	フネガイ目	フネガイ科
	50	VII-C01-02	サルボウガイ	<i>Scapharca subcrenata</i>	フネガイ目	フネガイ科
	51	VII-C01-03	コベルトフネガイ	<i>Arca boucardi</i>	フネガイ目	フネガイ科
	52	VII-D01-01	イガイ	<i>Mytilus coruscus</i>	イガイ目	イガイ科
	53	VII-D01-02	ムラサキインコガイ	<i>Septifer virgatus</i>	イガイ目	イガイ科
	54	VII-D01-03	ヒメイガイ	<i>Septifer keenae</i>	イガイ目	イガイ科
8	55	VII-E05-01	イタヤガイ	<i>Pecten albicans</i>	ウグイスガイ目	イタヤガイ科
	56	VII-E05-02	アズマニシキガイ	<i>Chlamys farreri</i>	ウグイスガイ目	イタヤガイ科
	-	VII-E05-03	トウキョウホホタテガイ	<i>Patinopecten tokyoensis</i>	ウグイスガイ目	イタヤガイ科
	-	VII-E09-01	ナミマガシワガイ	<i>Anomia chinensis</i>	ウグイスガイ目	ナミマガシワガイ科
	57	VII-E12-01	マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>	ウグイスガイ目	イタボガキ科
	58	VII-E12-02	イタボガキ	<i>Ostrea densamellosa</i>	ウグイスガイ目	イタボガキ科
	59	VII-E12-03	イワガキ	<i>Crassostrea nippona</i>	ウグイスガイ目	イタボガキ科
	60	VII-E12-99	イタボガキ科種不明	Ostreidae gen. & sp. indet.	ウグイスガイ目	イタボガキ科
9	61	VII-F02-01	マツカサガイ	<i>Inversidens japonensis</i>	イシガイ目	イシガイ科
	62	VII-F02-03	イシガイ	<i>Unio douglasiae</i>	イシガイ目	イシガイ科
	63	VII-G18-01	シオフキガイ	<i>Mactra quadrangularis</i>	マルスダレガイ目	バカガイ科
	64	VII-G18-02	バカガイ	<i>Mactra chinensis</i>	マルスダレガイ目	バカガイ科
	65	VII-G18-03	アリソガイ	<i>Coelomactra antiquata</i>	マルスダレガイ目	バカガイ科
10	66	VII-G18-04	ミルクイガイ	<i>Tresus keenae</i>	マルスダレガイ目	バカガイ科
	67	VII-G18-05	オオトリガイ	<i>Lutraria maxima</i>	マルスダレガイ目	バカガイ科
11	68	VII-G19-01	フジノハナガイ	<i>Chion dysoni semigranosus</i>	マルスダレガイ目	フジノハナガイ科
	69	VII-G20-01	サビシラトリガイ	<i>Macoma contabulata</i>	マルスダレガイ目	ニッコウガイ科
	70	VII-G20-04	テリザクラガイ	<i>Moerella iridescens</i>	マルスダレガイ目	ニッコウガイ科
	71	VII-G20-06	ヒメシラトリガイ	<i>Macoma incongrua</i>	マルスダレガイ目	ニッコウガイ科
	72	VII-G20-99	ニッコウガイ科種不明	Tellinidae gen. & sp. indet.	マルスダレガイ目	ニッコウガイ科
	73	VII-G22-01	ムラサキガイ	<i>Soletellina diphos</i>	マルスダレガイ目	シオサザナミガイ科
	74	VII-G22-02	フジナミガイ	<i>Soletellina boeddinghausi</i>	マルスダレガイ目	シオサザナミガイ科
	75	VII-G22-03	ハザクラガイ	<i>Psammotaea minor</i>	マルスダレガイ目	シオサザナミガイ科
	12	76	VII-G25-01	マテガイ	<i>Solen strictus</i>	マルスダレガイ目
77		VII-G29-01	ウネナシトマヤガイ	<i>Trapezium liratum</i>	マルスダレガイ目	フナガタガイ科
78		VII-G32-01	ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i>	マルスダレガイ目	シジミ科
79		VII-G34-01	ヒメカノコアサリ	<i>Veremolpa micra</i>	マルスダレガイ目	マルスダレガイ科
80		VII-G34-02	オニアサリ	<i>Protohaca (Notochione) jodoensis</i>	マルスダレガイ目	マルスダレガイ科
81		VII-G34-03	カガミガイ	<i>Phacosoma japonicum</i>	マルスダレガイ目	マルスダレガイ科
82		VII-G34-04	アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>	マルスダレガイ目	マルスダレガイ科
13		83	VII-G34-05	オキアサリ	<i>Gomphina (Nacridiscus) aequilatera</i>	マルスダレガイ目
	84	VII-G34-06	チョウセンハマグリ	<i>Meretrix lamarckii</i>	マルスダレガイ目	マルスダレガイ科
	85	VII-G34-07	ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>	マルスダレガイ目	マルスダレガイ科
	86	VII-G34-08	オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>	マルスダレガイ目	マルスダレガイ科
	87	VII-G36-01	ハナグモリガイ	<i>Glauconome chinensis</i>	マルスダレガイ目	ハナグモリガイ科
14	88	VII-H01-01	オオノガイ	<i>Mya arenaria oonogai</i>	オオノガイ目	オオノガイ科
	89	VII-H05-02	イシゴロモガイ	<i>Aspidopholas yoshimurai</i>	オオノガイ目	ニオガイ科
	90	VII-A01-01	コウイカ	<i>Sepia esculenta</i>	コウイカ目	コウイカ科

*は現生標本を参考として取り上げたもの

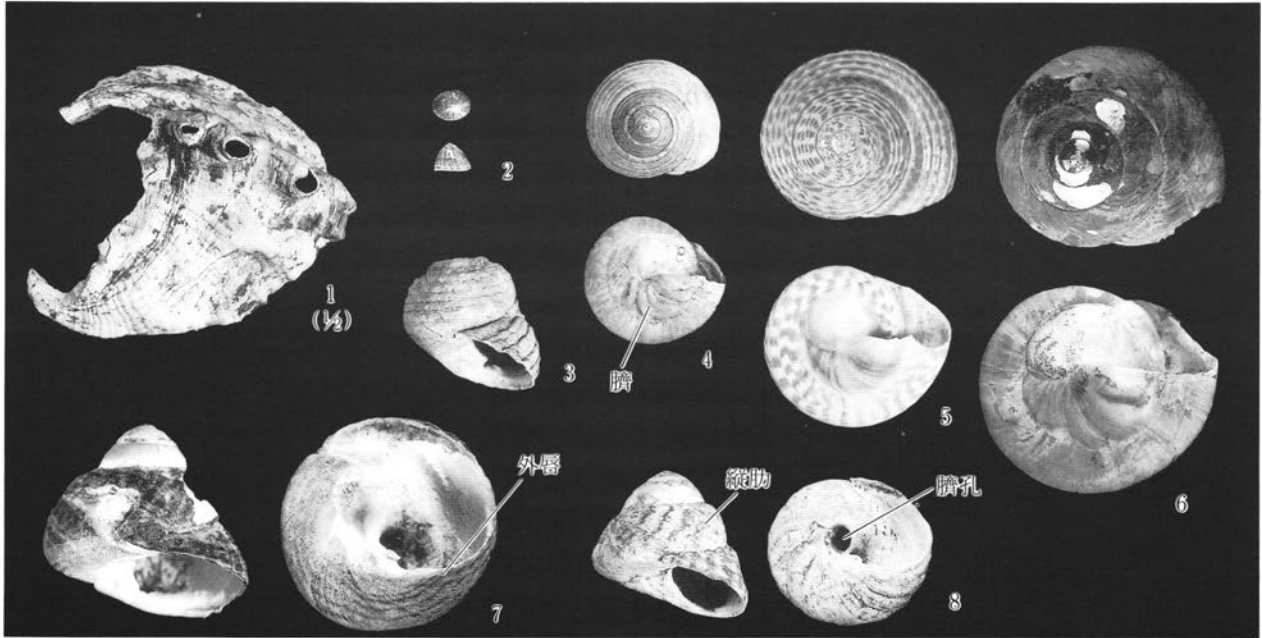
第70表 貝類標本分類コード

斜体文字は標本なし

綱	目	綱-目-科	科名
<i>I 無板綱</i>			
<i>II 多板綱</i>			
III 腹足綱前部亜綱 (マキガイ亜綱)	A 原始腹足目 (オキナエビスガイ目)	III-A -03	ミミガイ科
III 腹足綱前部亜綱 (マキガイ亜綱)	A 原始腹足目 (オキナエビスガイ目)	III-A -08	ユキノカサガイ科
III 腹足綱前部亜綱 (マキガイ亜綱)	A 原始腹足目 (オキナエビスガイ目)	III-A -12	ニシキウスガイ科
III 腹足綱前部亜綱 (マキガイ亜綱)	A 原始腹足目 (オキナエビスガイ目)	III-A -15	リュウチンサザエ科
III 腹足綱前部亜綱 (マキガイ亜綱)	A 原始腹足目 (オキナエビスガイ目)	III-A -17	アマオブネガイ科
III 腹足綱前部亜綱 (マキガイ亜綱)	B 中腹足目 (ニナ目)	III-B -05	タニシ科
III 腹足綱前部亜綱 (マキガイ亜綱)	B 中腹足目 (ニナ目)	III-B -09	タマキビガイ科
III 腹足綱前部亜綱 (マキガイ亜綱)	B 中腹足目 (ニナ目)	III-B -23	ムカヅガイ科
III 腹足綱前部亜綱 (マキガイ亜綱)	B 中腹足目 (ニナ目)	III-B -25	カワニナ科
III 腹足綱前部亜綱 (マキガイ亜綱)	B 中腹足目 (ニナ目)	III-B -28	ウミニナ科
III 腹足綱前部亜綱 (マキガイ亜綱)	B 中腹足目 (ニナ目)	III-B -32	オニツツノガイ科
III 腹足綱前部亜綱 (マキガイ亜綱)	B 中腹足目 (ニナ目)	III-B -48	タマガイ科
III 腹足綱前部亜綱 (マキガイ亜綱)	B 中腹足目 (ニナ目)	III-B -53	タカラガイ科
III 腹足綱前部亜綱 (マキガイ亜綱)	B 中腹足目 (ニナ目)	III-B -54	フジツガイ科
III 腹足綱前部亜綱 (マキガイ亜綱)	C 新腹足目 (バイ目)	III-C -01	アクキガイ科
III 腹足綱前部亜綱 (マキガイ亜綱)	C 新腹足目 (バイ目)	III-C -03	タモトガイ科
III 腹足綱前部亜綱 (マキガイ亜綱)	C 新腹足目 (バイ目)	III-C -04	ムシロガイ科
III 腹足綱前部亜綱 (マキガイ亜綱)	C 新腹足目 (バイ目)	III-C -07	テングニシ科
III 腹足綱前部亜綱 (マキガイ亜綱)	C 新腹足目 (バイ目)	III-C -17	コロモガイ科
III 腹足綱前部亜綱 (マキガイ亜綱)	C 新腹足目 (バイ目)	III-C -19	イモガイ科
III 腹足綱前部亜綱 (マキガイ亜綱)	C 新腹足目 (バイ目)	III-C -20	タケノコガイ科
III 腹足綱前部亜綱 (マキガイ亜綱)	D 異腹足目 (イトカケガイ目)		
IV 腹足綱後部亜綱	A 扇足目 (クチキレガイ目)	IV-A -01	トウガタガイ科
IV 腹足綱後部亜綱	B 頭蹄目 (ブドウガイ目)	IV-B -01	オオシノミガイ科
IV 腹足綱後部亜綱	C ウズムシウミウシ目		
IV 腹足綱後部亜綱	D スナウミウシ目		
IV 腹足綱後部亜綱	E アメフラシ目		
IV 腹足綱後部亜綱	F 背極目 (ヒトエガイ目)		
IV 腹足綱後部亜綱	G 有殻翼足目 (カメガイ)		
IV 腹足綱後部亜綱	H 囊舌目 (オクラクミドリガイ目)		
IV 腹足綱後部亜綱	I ドーリス目		
V 腹足綱有肋亜綱 (マイマイ亜綱)			
VI 指足綱 (ツノガイ綱)	A クチキレツノガイ目		
VI 指足綱 (ツノガイ綱)	B ツノガイ目	VI-B -01	ツノガイ科
VII 二枚貝綱	A キヌタレガイ目		
VII 二枚貝綱	B クルミガイ目		
VII 二枚貝綱	C フネガイ目	VII-C -01	フネガイ科
VII 二枚貝綱	D イガイ目	VII-D -01	イガイ科
VII 二枚貝綱	E ウグイスガイ目	VII-E -05	イタヤガイ科
VII 二枚貝綱	E ウグイスガイ目	VII-E -12	イタボガキ科
VII 二枚貝綱	F イシガイ目	VII-F -02	イシガイ科
VII 二枚貝綱	G マルスダレガイ目	VII-G -18	バカガイ科
VII 二枚貝綱	G マルスダレガイ目	VII-G -19	フジノハナガイ科
VII 二枚貝綱	G マルスダレガイ目	VII-G -20	ニッコウガイ科
VII 二枚貝綱	G マルスダレガイ目	VII-G -22	シオサザナミガイ科
VII 二枚貝綱	G マルスダレガイ目	VII-G -25	マテガイ科
VII 二枚貝綱	G マルスダレガイ目	VII-G -29	フナガタガイ科
VII 二枚貝綱	G マルスダレガイ目	VII-G -32	シジミ科
VII 二枚貝綱	G マルスダレガイ目	VII-G -34	マルスダレガイ科
VII 二枚貝綱	G マルスダレガイ目	VII-G -36	ハナグモリガイ科
VII 二枚貝綱	H オオノガイ目	VII-H -01	オオノガイ科
VII 二枚貝綱	H オオノガイ目	VII-H -05	ニオガイ科
VII 二枚貝綱	I ウミタケガイモドキ目		
環頸足綱	A コウイカ目	VIII-A -01	コウイカ科
環頸足綱	B ツツイカ目		
環頸足綱	C 八腕形目 (タコ目)		

4. 貝類標本写真図版・解説

PL. 1 (原始腹足目)



III 腹足綱前鰓亜綱 (マキガイ亜綱)

III-A 原始腹足目

ミミガイ科

マダカアワビ属の3種、マダカアワビ、メガイアワビ、クロアワビはよく似ている。いずれも殻は壊れやすく、貝塚産ではたいてい破片であるため、種までの特定はむずかしい。

1 マダカアワビ III-A03-01

標本は谷津台貝塚の前期貝層から得られたもので、背面の孔列が大きい特徴からマダカアワビである。

ユキノカサガイ科

2 ツボミガイ III-A08-01

ヒメコザラガイの生態型の一つ(亜種)である。ウミナナ殻に付着して、いちじくしく殻頂の高くなったものを「ツボミガイ P. P. lampanicola Habe」として区別する場合もある。『世界文化社』。今のところ貝塚標本ではウミナナ類に付着したこのタイプに限られるので、亜種名で報告することになっている。

ニシキウズガイ科

3 イシダタミガイ III-A12-11

外洋水の影響の強い房総南部や利根川河口域の貝塚で見られる。標本は中台貝塚の

ものである。レンガ状の模様や殻高の形状が独特なので同定は容易である。

4 イボキサゴ III-A12-21

東京湾東岸の大型貝塚の最重要種である。よく似た種にキサゴがあるが、本種は内湾に生息している。キサゴより小さく、縫合下に顆粒が生じるものが多い。臍盤(滑層)が殻径の1/2以上。区別のポイントとして信頼できるのは臍盤の大きさである。ただし、内湾種主体の貝層であれば、とくにくわしい観察をせずにイボキサゴとしている。

5 キサゴ III-A12-22

イボキサゴによく似るため参考として東京湾盤洲産の現生標本を示した。今のところ当センターでは貝塚産の標本を得ていない。外洋種で、イボキサゴより大きくなり、縫合下の顆粒は生じないものが多い。臍盤(滑層)が殻径の1/2以下。

6 ダンペイキサゴ III-A12-23

「ナガラミ」と呼ばれて九十九里浜の名物である。縄文時代にもこの地域の外洋に近い貝塚の主要構成種である。形状はイボキサゴに似るが、ずっと大きくなるので区別は容易である。小さめの個体では、螺溝

が弱く、螺肋と顆粒がなくて表面が平滑であることにより区別できる。

クボガイ亜科

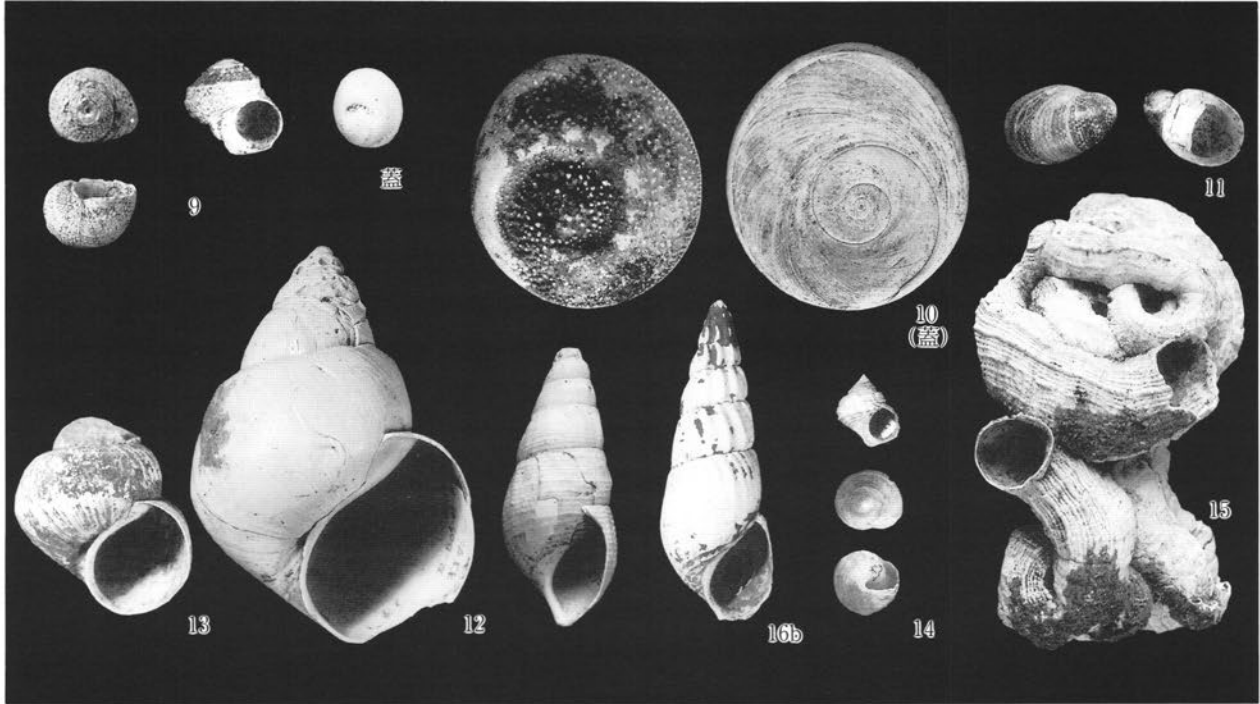
「磯もの」と呼ばれて食用にされるものが多く、岩礁性の貝塚に多い。クボガイ、ヘソアキクボガイ、ヒメクボガイ、コシダカガンガラはよく似ているので注意が必要である。

7 クボガイ III-A12-05

潮間帯の礫海岸に多い。臍孔が閉じて緑に塗られている。標本は中台貝塚産で、クマノコガイとしていたが、殻表にしっかりとうねをもつので本種である。よく似たヘソアキクボガイはふつう臍孔が開いており、また、外唇の端部が細長く巻いている。

8 コシダカガンガラ III-A12-32

潮間帯の岩礫海岸に多い。臍孔が開いて周囲が白いことで、クボガイと区別できる。臍孔の開いたヘソアキクボガイとは殻底に螺肋がない(成長肋のみがある)こと、外唇がそれほど長く巻かないことで区別する。殻表の斜めのうね(縦肋)はヘソアキクボガイ、ヒメクボガイより太い。標本は中台貝塚のもので、報告ではクボガイとしていたが、臍孔が開いているので誤りである。



リュウテンサザエ科

9 III-A15-01 スガイ

貝塚からは殻と蓋が出土する。一般に潮間帯の岩礫底に棲むが、内湾性のマガキの多い貝塚でもよく見られる。奥東京湾岸貝塚でまとまって出土することがあり、湾奥の泥干潟でカキ礁などに付着していたものとみられる。とくに形状の似た種はなく、殻表や軸部分の破片でも同定できる。軸部分は真珠質の光沢があり、殻口は円く、臍孔がない。外唇は縁取られる。「磯もの」の中でも味の良い貝として知られる。

10 III-A15-03 サザエ

殻がもろく、貝塚からはたいがい破片で出土する。蓋のみが出土する場合も多い。

アマオブネガイ科

11 III-A17-02 ヒロクチカノコガイ

アマオブネガイ科には形状の似た種が多いが、写真の有吉北貝塚標本では殻表の鋸歯ないし網目状の模様も残っているので、本種と特定できる。そのほか、螺塔が全くといっていいほど形成されない。内唇滑層が発達して平坦になり、殻口は半円形を呈する、といった特徴がある。

現在では有明海以外では稀で、本州中部以南に生息する暖海種であるが、県内のい

くつかの縄文貝塚で見ることができる。

III-B 中腹足目

タニシ科

県内の貝塚で検出例があるのはオオタニシとマルタニシの2種である。おもに、オオタニシは湖沼や河川で、マルタニシは水田で見られ、どちらも食用になる。マルタニシは水稻耕作とともに日本に移入したと考えられており、2種を見分けることは重要である。よく似ているので、慎重を期す必要がある。これまでに同定された結果をみると、縄文時代はほぼオオタニシに限られ、弥生時代以降はマルタニシが多いようである。荒海貝塚の晩期貝層ではマルタニシが発見されている点は興味深い。なお、当センターの分類作業では破片をパイと混同したことがあった。体層の殻表はやや似ているが、タニシ類はずっと殻が薄い。

12 III-B05-01 オオタニシ

マルタニシに比べて螺層の膨らみが弱く、数本ある弱い螺肋が少し角張っている。

13 III-B05-02 マルタニシ

オオタニシに比べて螺層が丸く膨れており、縫合のくびれがつよい。またそれほど大きくならない。

タマキビガイ科

14 III-B09-01 タマキビガイ

しぶき帯にいて海水から逃げながら岩礁上に群棲している。螺塔に2本、体層に3本の太い螺肋がある。軸の下端に臍孔、水管溝ともたないのが特徴である。

ムカデガイ科

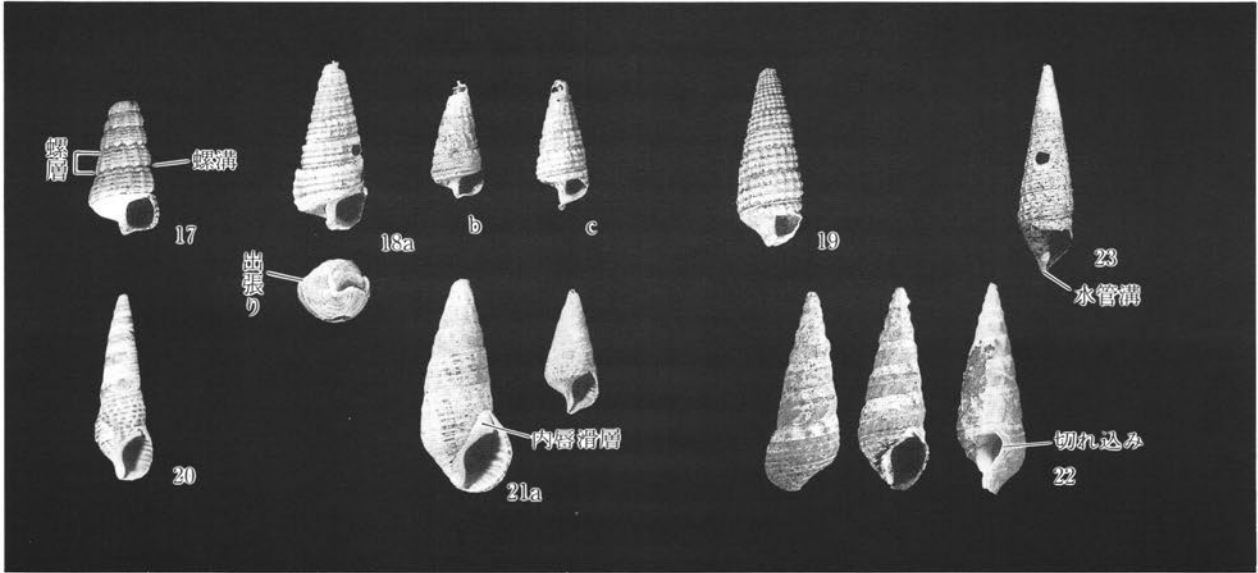
15 III-B23-01 オオヘビガイ

管状の形状と、細かい鱗状の殻表の特徴から、破片でも同定可能である。オオヘビガイ属には暖海や深海に形態の似たものがいくつかあるが、その可能性はとても低いいため、本種としておく。有吉北貝塚で破片を得ているが、写真は古墳時代(高沢遺跡)のもので、イガイに付着して持ち込まれている。

カワニナ科

16 III-B25-01 カワニナ

ウミナナ科などと同様の塔形であるが、殻が薄く、水管溝がないことなどから間違えることはない。多くの地方変異型があり、貝塚産でも複数の亜種が見られる。標本aはカワニナ型、bはチリメンカワニナ型である。



ウミナナ科

形態の似た多くの種が貝塚から検出される。現在、日本産6属のうち標本を所有しているのは以下の3属6種である。なお、オノツノガイ科のカニモリガイもよく似ている。

フトヘナタリガイ属

フトヘナタリガイ

ヘナタリガイ属

カワアイガイ

ヘナタリガイ

ウミナナ属

ホソウミナナ

ウミナナ

イボウミナナ

オノツノガイ科

カニモリガイ

幼貝や残りの悪いものでは種までの同定は難しい上、成貝でも間違えやすいものが多い。東京湾岸の貝塚では混獲によると判断できるケースが多いので、あまりよく観察せずに「ウミナナ属」「ヘナタリガイ属」としてきた。しかし、実際には両者を区別できないものはウミナナ属に含めてしまうなど問題があった。今後は、数量が多く、食用に採取されている場合など、特に必要な場合は種レベルの同定を行い、通常は「ウミナナ科Batillariidae gen. & sp. Indet.」としていきたい。

17 III-B28-01 フトヘナタリガイ

カワアイガイとヘナタリガイに似ている。螺層が中ほどで膨らみ、5本以上の螺肋を持っていれば本種である。また、殻底の平らな部分まで強い螺溝が続いている。殻頂部の螺塔は生きているときから欠けている。

18 III-B28-02 ヘナタリガイ

螺層には3~4本の螺肋があり、浅い縦溝で区切られて顆粒状になる。中ほどが膨らまないことでフトヘナタリガイと区別できる。ただし、3本の螺肋が四角く規則的に並んでいればカワアイガイである。螺層はイボウミナナともよく似ている。殻底の平らな部分があれば本種である。ここにも螺肋をもつが、フトヘナタリガイほど強くない。かなり大きく成長した個体であれば、体層の一部分が強く出張っているという本種のみの特徴があり、容易に判断できる。

b・cは幼貝で螺層の縦溝が発達せず、ウミナナ属との区別は難しい。殻底が平らなのでヘナタリガイ属とわかるが、破片なら同定は無理であろう。

19 III-B28-03 カワアイガイ

ヘナタリガイ属であり、殻底部がやや平らになっている。螺層は一層に3列のつぶつぶが規則的に並ぶ。

20 III-B28-04 ホソウミナナ

当センターでは検出例がないが、県内の縄文貝塚でいくつか同定されているので、

参考として盤洲産の現生標本を掲げた。外洋から湾口部に生息し、盤洲では現在ふつうに見られる。写真のように螺塔が細く、体層や殻口が丸く膨らむことでウミナナと区別できるが、もっとウミナナに近いものもあって、一部は区別が難しい。

21 III-B28-04 ウミナナ

ヘナタリガイ属の殻底が平らであるのに対し、ウミナナ属は丸みを帯びている。イボウミナナとの差異は図鑑で見るほど明確でないものが混じる。螺層全体が若干膨らむ。殻口の形状は丸みが強く、内唇の滑層が発達している。とくに後口側が丸みを帯びるほど発達していれば本種である。そのほか、螺塔の縦肋が発達せず、螺溝が規則的であることが特徴である。

22 III-B28-05 イボウミナナ

螺層にイボ(顆粒)をもつ白帯がある個体が多い。ウミナナほど螺層の全体が膨らまない。成貝では殻口の外側(外唇)が切れ込んでいて区別しやすい(写真)。幼貝ではヘナタリガイに似ているので注意を要する。

オノツノガイ科

23 III-B32-01 カニモリガイ

ウミナナ科の貝に似ている。螺層と殻口の形状が細長いことで区別できる。水管溝は管状に近く、やや反り返る。



タマガイ科

24 III-B48-01 ツメタガイ

内湾性の貝塚でたいてい出土するが、まとまった例は少ない。肉は硬めだが大きく、現在でも「いちごがい」と呼ばれて食べられている。

形状や殻表の特徴は独特で、破片でも同定可能である。ところで、貝塚産の標本には図鑑に示されたツメタガイ、ホソヤツメタガイの両者が見られる。しかし、最近間嶋は両者をツメタガイ *Gulossaulax didyma* として同種内の異型としている(間嶋1987)。有吉北貝塚の標本でも写真b~fのように臍索の発達具合は漸移しているように区別しがたい。したがって1種として扱い、必要に応じて、臍索の未発達なものを「ツメタガイ型」、発達したものを「ホソヤツメタガイ型」とする。比較的湾口に近い山野貝塚や峰ノ台貝塚ではホソヤツメタガイ型が多いようである。

25 III-B48-03 ネコガイ

形状はツメタガイに似るが、殻表に螺溝を刻んでいることで区別できる。なお、木

戸作貝塚でフクロガイかヒメミミガイと同定されたものは、殻高が高いことから本種である(黒住・岡本1994)。

タカラガイ科

貝塚からはしばしば製品・未成品の形で発見される。タカラガイ科は種類が多く、色彩が残っていない貝塚出土個体の同定は難しい。しかし、種の同定によってどの海域から持ち込まれたかを検討することが可能になるので、専門家に同定を依頼すべきである。有吉北貝塚の標本は千葉県立中央博物館黒住氏によって同定され、生息域はすべて「房総半島以南」であった。したがって、間接的に入手したとしても、安易に「南洋」からの交易品としてはいけないことになる。また、黒潮に乗って房総半島に漂着したものを海岸で拾ったこともあったであろう。

同定根拠の記載は省略し、写真だけを掲載する。なお、製品として報告されたものは標本の箱ではなく、各遺跡の整理箱に保管されている。

26 III-B53-01 オミナエシダカラガイ

房総半島以南の潮間帯の岩礁海岸に生息する。背面を擦り切った痕跡をもつ。殻口部のさらに分割したタイプではなく、殻口部全体の製品が破損したものであろう。

27 III-B53-02 キイロダカラガイ

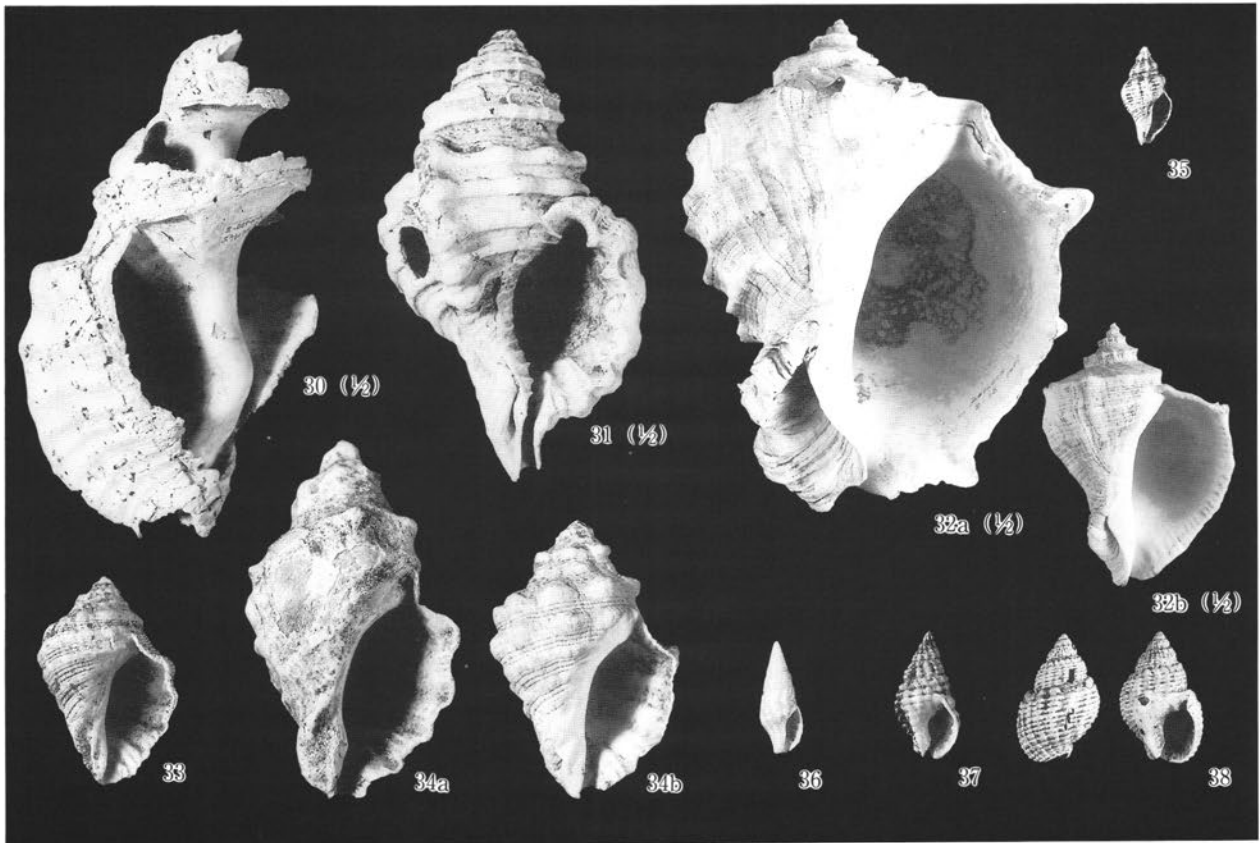
房総半島以南の潮間帯の岩礁に生息する。背面は擦り切りによって取り去られたものとみられる。遺跡から出土するタカラガイ製品は模様のきれいな背面を擦り切って殻口部を残した製品が多い。

28 III-B53-03 ハナヒラタカラガイ

房総半島以南の潮間帯の岩礁、珊瑚礁に多産する。ときには潮だまりにはき集めたような大群を作る。標本は背面が大きく割れていて、製品に加工した様子はない。

29 III-B53-04 ホシキヌタガイ

房総半島以南の潮間帯下部から水深約20mまでの岩礫底に生息する。背面が大きく割れている。



フジツガイ科

30 III-B54-01 ポウシュウボラ

有吉北貝塚で1点のみ見つかった。岩礁産である。水磨を受けて傷んだ死貝を持ち込んだものらしい。

31 III-B54-02 カコボラ

山野貝塚で1点見つかった。湾口部のいくつかの貝塚で出土例がある。潮間帯下部からより深い岩礁底に生息するので、死貝を持ち込んだ可能性が高い。

III-C 新腹足目

アクキガイ科

32 III-C01-01 アカニシ

県内の縄文貝塚ではとくに似たものが出ないので、破片でも同定可能である。結節は角状になるものからほとんど出っ張らないものまで変異が大きいとされている。写真aはチリメンボラに似ているように見えるのは、やや下から撮影したため、結節が強調されたものである。

33 III-C01-02 イボニシ

レイシガイに似る。結節が弱いことで見

分けるが、結節の小さめのレイシガイは見分けにくい。岩礁域に多いが、肉食でとくにカキを好むといひ、内湾砂泥底種が中心の貝塚でもしばしば見ることができ、有吉北貝塚ではままとまっている例もあった。

34 III-C01-03 レイシガイ

イボニシに似る。一般にレイシガイの結節は大きく丸く発達するが、小さめのものではイボニシとの区別が難しい。山野貝塚の標本の結節は大きくないが、高いことでイボニシと区別した。

35 III-C01-04 アクキガイ科種不明

図鑑を見ると、写真の標本に似るのはカゴメガイ、ツクシカゴメガイ、ヒメヨウラクガイの3種だが、今のところ決定できない。

タモトガイ科

36 III-C03-02 マルテンスマツムシガイ

タモトガイ科の中で体層の周縁が鈍く角張り、殻口が比較的に広いこと、外唇内壁にひだを持たないことなどから本種とした。写真には図鑑と同様の綾杉紋様も見える。

本種はおもに海藻の間に棲む。これまでに確認したところでは上新宿貝塚と上貝塚のマガキの多いサンプルに混じており、マガキに付着した海藻に付いて持ち込まれた可能性が高い。必ずしも海藻を利用していた証拠とはいえないようである。

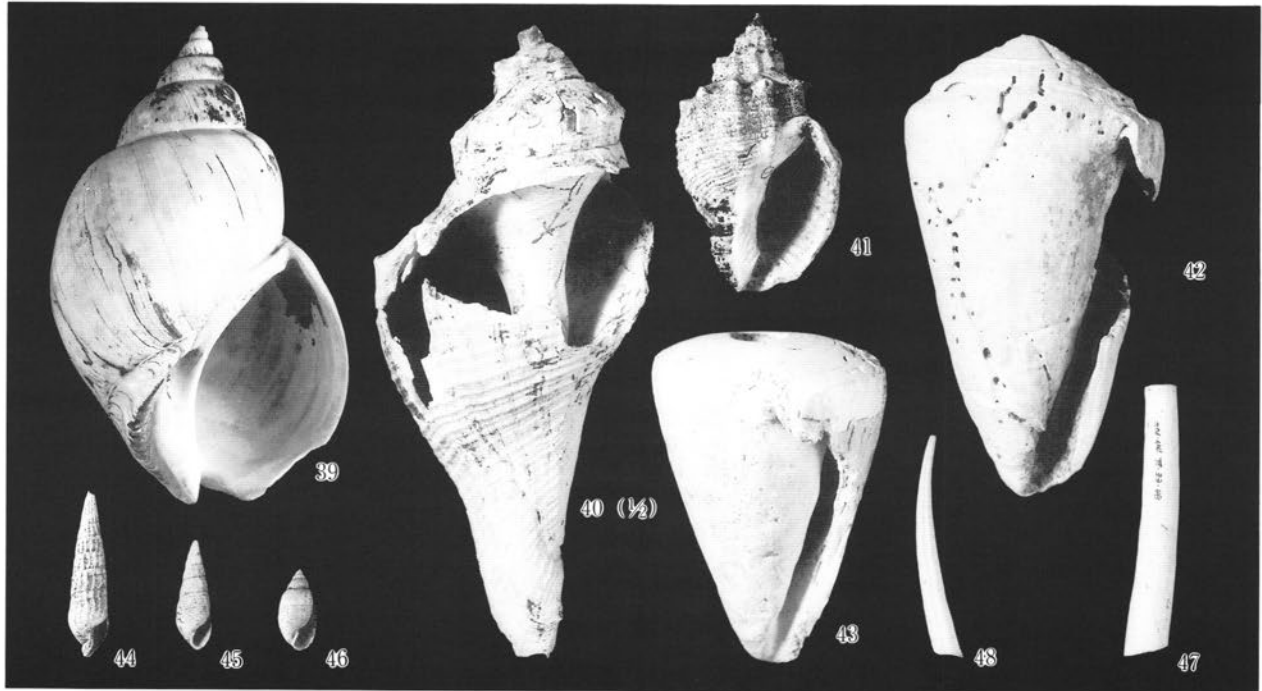
ムシロガイ科

37 III-C04-01 アラムシロガイ

イボキサゴ層に多く混入している。よく似たムシロガイが時々見られるので注意を要する。体層がややふっくらとして、むしろ状の模様が細かく見えたならムシロガイの可能性はある。決め手は外唇内縁のひだが4つ内外なら本種である。

38 III-C04-02 ムシロガイ

アラムシロガイに似ていて、外唇内縁のひだがたくさんあれば本種である。アラムシロガイより体層の丸みが強く、殻表のむしろ状の彫刻が細かい。また、成貝では内唇滑層が前種より広いが、幼貝では当てはまらない。



エゾバイ科

39 III-C05-01 バイ

あまり似た種がなく、同定は容易である。ただし、タニシ類と混同した例があった。本種は殻がずっと厚い。

テングニシ科

40 III-C07-01 テングニシ

イトマキボラ科のナガニシとともに東京湾岸の貝塚で散見する。標本は山野貝塚から出土したものである。

コロモガイ科

41 III-C17-02 コロモガイ

高沢遺跡から1点出土している。トカシオリイレボラに似る。2種で検討すると、標本は螺塔が高く、軸唇に3個のひだがあることからコロモガイとした。トカシオリイレボラは軸唇に弱いひだが2個ある。

イモガイ科

イモガイ科は種類が多く、貝塚出土個体の同定は難しい。有吉北貝塚の標本は県立中央博物館黒住氏に同定をお願いしたものであり、生息域はすべて「房総半島以南」であった。安易に「南洋」からの交易品とすることはできない。

同定根拠の記載は省略する。

42 III-C19-01 サヤガタイモガイ

房総半島以南の潮間帯の岩礁に生息する。水磨を受けた打ち上げ品を持ち込んだのであろう。

43 III-C19-02 ハルシャガイ

房総半島以南の潮間帯下部に深の岩礫底、サンゴ礁に生息する。各頂部は擦痕が著しく、すでにかなり減っている。加工品または未成品である。

タケノコガイ科

44 III-C20-02 ヒメトクサガイ

タケノコガイ科やオニツノガイ科に近似種があるが、螺層に顆粒をもたず、はっきりした縦肋をもつことから本種とした。標準和名は『保育社』『学研』でトクサガイとしていたが、『世界文化社』に従う。

IV 腹足綱後鰓亜綱

IV-A 腸紐目 (クチキレガイ目)

トウガタガイ科

45 IV-A01-01 マキギヌガイ

規則的な螺状溝を刻む螺層をもつ。形状も『学研』の写真と酷似するので本種とした。ただし、参考とした3つの図鑑では本種とマキモノガイ (外形はずっと丸く膨らむ) との間で和名に混乱がある。『世界文化社』には本種の記載がないため、『学研』に

従うことにした。

IV-B 頭楯目

オオシイノミガイ科

46 IV-B01-01 オオシイノミガイ

オオキジビキガイに似る。写真の標本は、『世界文化社』図鑑の写真でみると形状が両者の中間ぐらいに見える。しかし、殻表の螺状溝が体層の下2/3ほどにあって、それより上部には見られないこと、体層が殻高の1/3を占めることから本種とした。

VI 掘足綱 (ツノガイ綱)

VI-B ツノガイ目

ツノガイ科

県内の縄文貝塚ではツノガイとヤカドツノガイの2種の出土例がある。いずれも潮間帯下部より深い海域に生息しており、貝塚産の資料は沖合からまたは自然貝層から浜に流れ着いた貝殻が持ち込まれた可能性が高い。殻口部付近を使った管玉状の装飾品に加工されることがある。

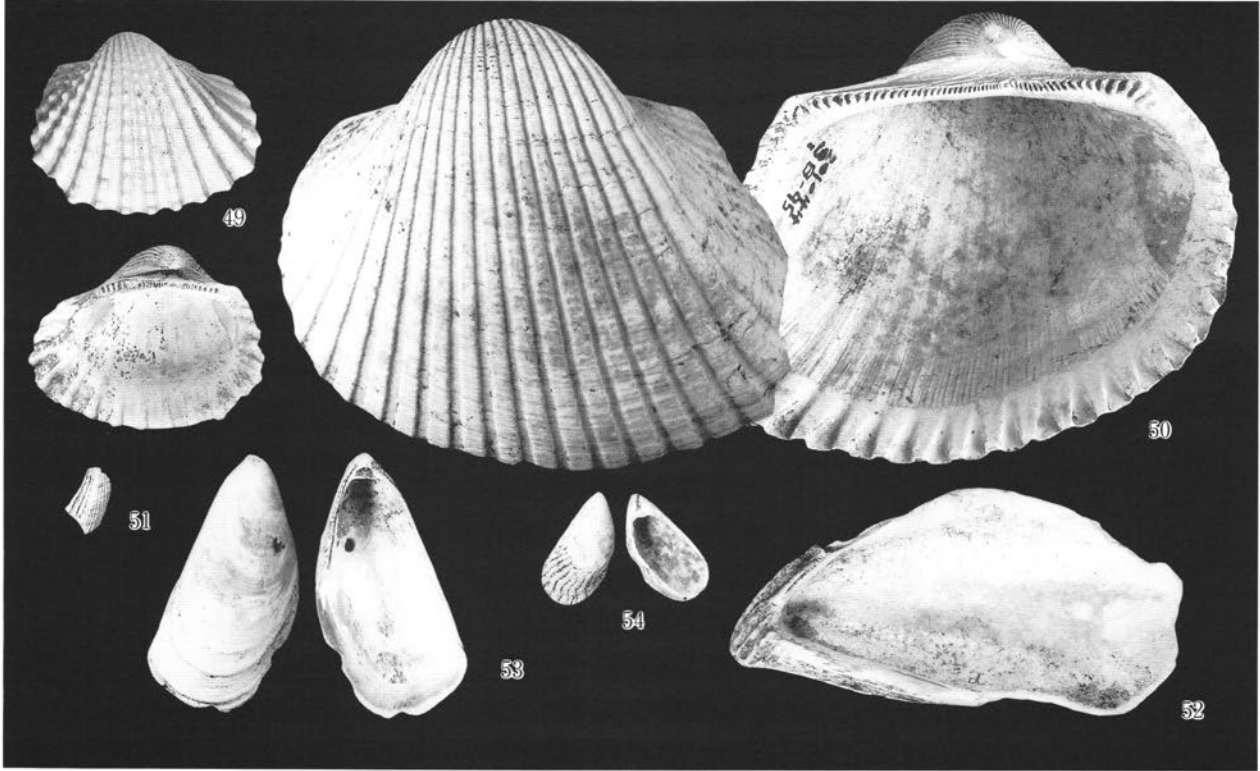
47 VI-B01-01 ツノガイ

殻頂付近には9本の稜があり、殻口に向かって消える。

48 VI-B01-02 ヤカドツノガイ

6から8本の縦肋と弱い間肋をもつ。殻口から見ると八角形になるものが多い。

PL. 7 (フネガイ目・イガイ目・ウグイスガイ目1)



Ⅶ 二枚貝綱

Ⅶ-C フネガイ目

フネガイ科

県内貝塚で出土している種について特徴を示す。ほぼこの順に大きくなる。なお、貝塚産標本を所有しているのはハイガイとサルボウガイのみである。以前はハイガイまで含めてAnadara (アナダラ属)とされていたが、現在は2属に分けられている。

リュウキュウサルボウ属 Tegillarca

ハイガイ 17~18本/目立つ

サルボウガイ属 Scaphaca

クイチガイサルボウガイ

30~34本/左殻殻頂にあり

サルボウガイ 30~34本/左殻殻頂にあり

サトウガイ 38本内外/なし

アカガイ 42~43本/なし

(放射肋数/顆粒・結節)

放射肋数から判断できないのはクイチガイサルボウガイとサルボウガイである。

49 Ⅶ-C01-01 ハイガイ

他の種に比べて放射肋がずっと少ないので区別しやすい。暖海種で、縄文時代の温暖化を示す指標としてよく知られている。県内の貝塚では縄文早・前期に多く、東京湾では後期まではまとまった例がある。

50 Ⅶ-C01-01 サルボウガイ

今のところクイチガイサルボウガイとの区別ができないが、従来通りサルボウガイとしておく。クイチガイサルボウガイは肋間が広く、左殻と右殻の腹縁の食い違いが著しいとされているが、未確認である。サルボウでも右殻は肋間が広い個体が多く、図鑑の写真に比べて肋間が広いからといって、クイチガイサルボウガイであるとはいえない。今後クイチガイサルボウガイが混じっていないかどうか注意したい。

51 Ⅶ-C01-03 コベルトフネガイ

同属のオオタカノハガイ、ワシノハガイ、フネガイに似るが殻表の特徴から本種とした。ワシノハガイより放射肋が細かい。成長脈が殻頂部付近以外は弱く、布目状にならないことから、オオタカノハガイ、フネガイと区別できる。

Ⅶ-C イガイ目

イガイ科

殻の前後が非対称で、後側縁が大きく成長する。これによって左右を見分ける。

52 Ⅶ-D01-01 イガイ

外洋の岩礁に生息するため、県内の縄文貝塚の出土例は少ない。標本は高沢遺跡の

古墳後期の貝層から出土したものである。

イガイ属 (Mytilus) には殻頂の内側に隔板がない。同属の中では殻頂がムラサキイガイではやや鈍角であるのに対して、本種では鷲鼻状に曲がっている。しゅうり貝と呼ばれ、東北地方では味噌汁の具などとして、おいしい貝とされている。

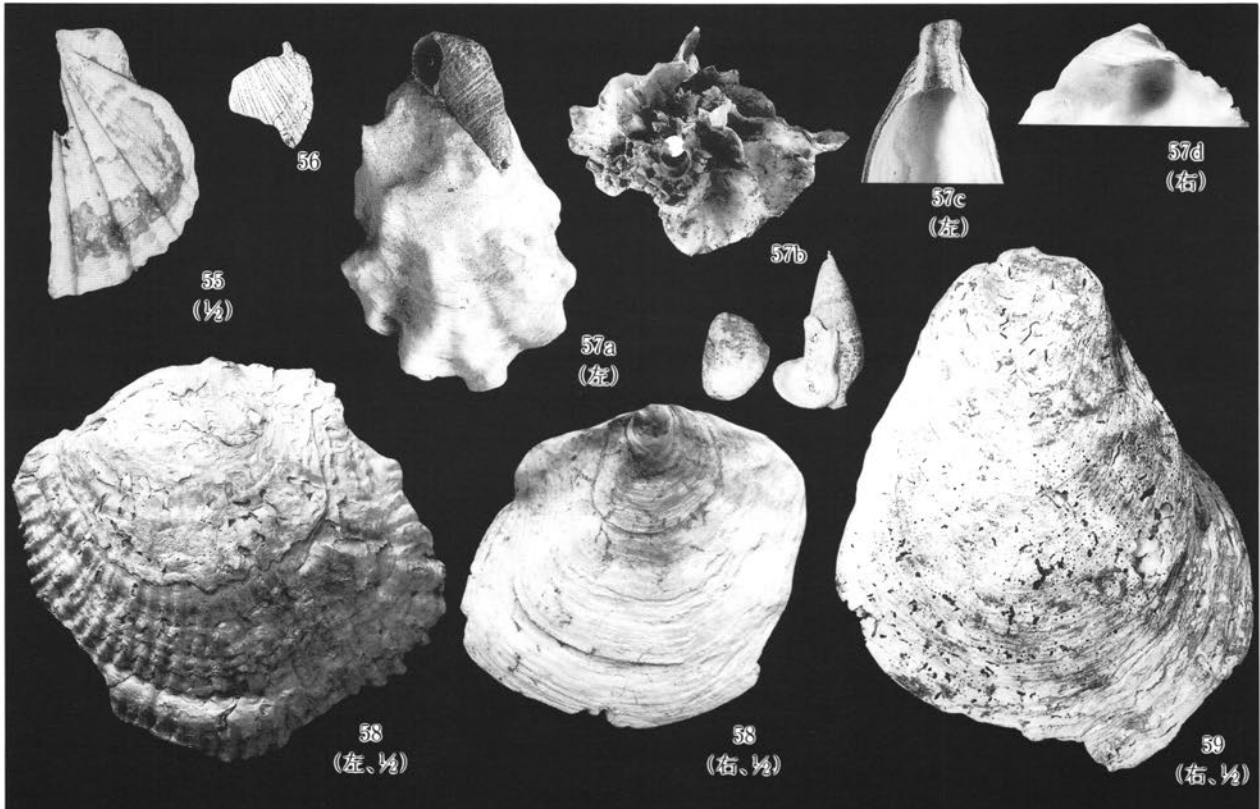
なお、ムラサキイガイはムール貝として知られるヨーロッパ原産の移入種であり、遺跡からは出土せず、こちらは内湾に多い。

53 Ⅶ-D01-02 ムラサキインコガイ

殻頂の内側に隔板を持つ点で、Mytilus イガイ属や Hormomya ヒバリガイモドキ属と区別される。同属 (Septifer) のクジャクガイ・シロインコガイとは腹縁の内側が細かく刻まれていないこと、腹縁の近くの殻表は放射溝が弱く、成長脈のみであることで見分けることができる。

54 Ⅶ-D01-02 ヒメイガイ

前種によく似るが、殻が厚めなこと、放射溝が縁まで続いていることで区別できる。なお、シロインコガイ (伊豆半島以南の暖海種) はもっとよく似ていて判別が難しいが報告に従う。



Ⅶ-E ウグイスガイ目

イタヤガイ科

ホタテガイ類である。殻頂部の両側に張り出した耳状部をもち、ちょうつがい部が左右均等（等歯式）なのが特徴である。左右の殻が身と蓋になる左右不等殻の種と等殻の種あり。

55 Ⅶ-E05-01 イタヤガイ

有吉北貝塚で1点破片が出土している。殻は膨らんでおらず、左右不等殻の種の左殻である。放射肋の間隔が広いので、イタヤガイとした。イタヤガイは放射肋が8~10本であるのに対して、近縁のハナイタヤガイは16本ぐらいある。

56 Ⅶ-E05-02 アズマニシキガイ

有吉北貝塚で破片が出土した。ホタテガイ形で放射肋上に鱗片が立つ。左殻は数本おきに強い放射肋があり、右殻より膨らむ。

Ⅶ-E05-03 トウキョウホタテガイ

縄文時代には絶滅していた化石種である。下総台地の成田層に多い、更新世後半の寒冷期の示相化石である。有吉北貝塚標本も自然貝層か、またはそれが浜に流れ着いた化石を持ち帰ったものであろう。

ナミマガシワガイ科

Ⅶ-E09-01 ナミマガシワガイ

岩礁域に生息するが、カキ礁にも伴う。流山市の上貝塚貝塚、上新宿貝塚で出土している。よく似たナミマガシワガイモドキとは左殻内面の筋肉痕により区別できるとされる（『世界文化社』）が難しい。黒住氏の教示により本種とした。

イタボガキ科

マガキは縄文時代の貝塚を構成する最重要種の一つである。一方、イタボガキはおもに縄文中期の貝輪の材料として知られている。殻が薄いもの、右殻のよく膨らんだものは破片でもマガキとわかるが、わかりにくいものはイタボガキ科としている。膨らんだ側が左殻である。

57 Ⅶ-E12-01 マガキ

生息環境によって形態の変異が大きい。
①別のカキの殻に付着、②他の貝（ハマグリ、ウミニナ=写真a等）に付着、③棒状の植物に付着、④付着痕跡のないもの、などをみる。内湾砂底の漁を中心とした貝塚では②と③が多く、湾奥（河口域）の干潟の漁を中心とした貝塚では、①④が多い。写

真bは①+③である。なお、1個と数えるのは殻頂先端を残すものに限るべきである。左右の形状は簡単に区別できる（写真）ので、小片でも同定が可能である。

58 Ⅶ-E12-02 イタボガキ

貝輪の素材はみな本種とされてきたが、本来イワガキとの区別が専門家でも難しい。有吉北貝塚では両種が確認された。突出部、または栓皮茸き状の整った成長肋をもつものはイタボガキである。明白でないものは「イタボガキ科」または「イタボガキかイワガキ」とするべきである。なお、本種は砂泥底に、イワガキは岩礁域に生息する。

59 Ⅶ-E12-03 イワガキ

イタボガキとの区別が難しい。今のところ積極的に本種と同定するための特徴を見いだすことができない。有吉北貝塚標本は中央博黒住氏によって同定された。

60 Ⅶ-E12-04 イタボガキ科種不明

破片や幼貝は種レベルの同定が困難である。疑いのあるものは不明としておくべきであろう。写真はウミニナに付着して持ち込まれたのが確認できる幼貝の例である。



Ⅶ-F イシガイ目

イシガイ科

強い真珠光沢をもつ小さな二枚貝はこの類のものとみてよい。県内貝塚で出土するのはほぼマツカサガイとイシガイに限られ、よく似ている両種の区別が問題となる。いずれも淡水種であり、マツカサガイは流れのある河川に、イシガイは河川からクリーク状の部分にまで生息する。後期以降にイシガイが多くなるのは、谷底に泥が発達したことを示す可能性がある。

61 Ⅶ-F02-01 マツカサガイ

イシガイとは形状が似ており、側歯の形状や殻表のさざ波状の彫刻も共通する。以下の特徴によって区別し、難しいものは「イシガイ科種不明」としている。

①殻全体が残っていれば、イシガイの方が細長いことで区別できる。

②腹縁に若干でも湾入があればイシガイ。

③さざ波状(松かさ状)の模様は腹縁近くまであればマツカサガイ。(大型に成長したものは模様が消失するとされるが、それほど大きな個体はあまり見られない)

④マツカサガイの主歯(擬主歯)は厚く、表面の溝は放射状。イシガイは薄く、表面の溝は後背縁と平行である。

62 Ⅶ-F02-03 イシガイ

マツカサガイと似ている。マツカサガイで示した特徴によって区別している。

Ⅶ-G マルスダレガイ目

バカガイ科

シオフキガイ、バカガイ、アリソガイはちょうつがいの形状や殻表の成長肋などが似ている。ただし、注意すれば形・大きさによって破片でも区別できる。

63 Ⅶ-G18-01 シオフキガイ

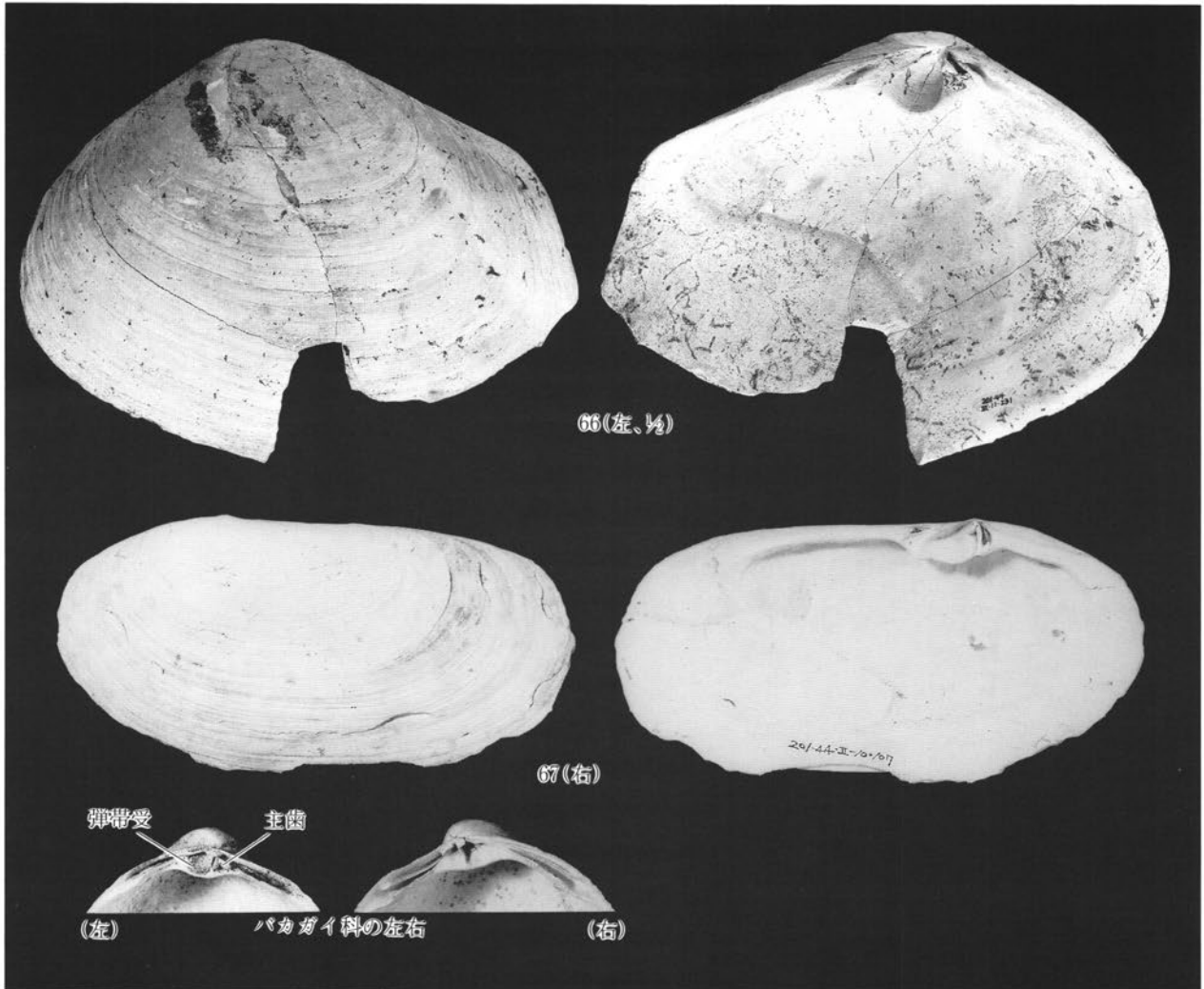
内湾部の貝塚の主要構成種である。バカガイ、アリソガイより殻がよく膨らみ、背縁の丸みが強く、殻頂部が丸く盛り上がる。殻表の成長肋は規則的で深い。なお、破片はヤマトシジミと間違えることがあるが、本種は膨らみ(丸み)が強い。

同属のバカガイと同様に砂を吐きにくいいためか、美味であるにもかかわらず市場では下等とされ、加工食品に利用されている。

64 Ⅶ-G18-02 バカガイ

成長肋は、殻頂に近い部分で弱く、平滑。腹縁の近く、とくに前後では太く低い肋が明らかである。全体やちょうつがいの形状はアリソガイに似ているが、本種の方が前後に長い。貝塚産でも殻に光沢が残るものが多い。

味が良く資源量も多いので水産上きわめ



て有用な種の一つでありながら、貝塚からまとまって出るとは少ない。アサリやハマグリと違ってバカガイは生活しているときから砂を含んでいるため、砂抜きができない。そこで、市場にはむき身を洗ってから生、茹で、干し貝(桜貝)とするか、部位毎に分けて、青柳(身)、小柱(貝柱)、ひも(外套膜)として出荷されている。近世以前には砂が入っている貝として敬遠されたのではないか。

65 VII-G18-03 アリソガイ

成長肋は薄く、規則的な同心円の細いしわ状。ただし、平滑になったものも多い。太い肋は生じないため腹縁はバカガイと見間違えることはないが、殻頂付近は似ている。バカガイの方が前後に長く、表面の光沢が強い。

生息域は外洋であるにもかかわらず、中期の内湾性の貝塚から貝器として出土する。

とくに有吉北貝塚では多数であり、ほとんどが使用痕を持つ。本種の殻の特徴が何らかの作業に適しているため、九十九里方面などから運ばれたものであろう。

66 VII-G18-04 ミルクイガイ

殻が大きく厚い。県内の貝塚では他にこれほど厚い二枚貝はなく、破片でも特定できる。すし種になる太い水管が出たまま生活するため、殻の後端が曲がって開いている。大きな弾帯受をもつ。潜水しなければ採れない深さにいるため、縄文貝塚ではまとまった出土はない。死貝を持ち込んで、加工しない道具として使われたケースが多かったと思われる。有吉北貝塚標本には、内面にも波に洗われた痕跡がある。

67 VII-G18-05 オオトリガイ

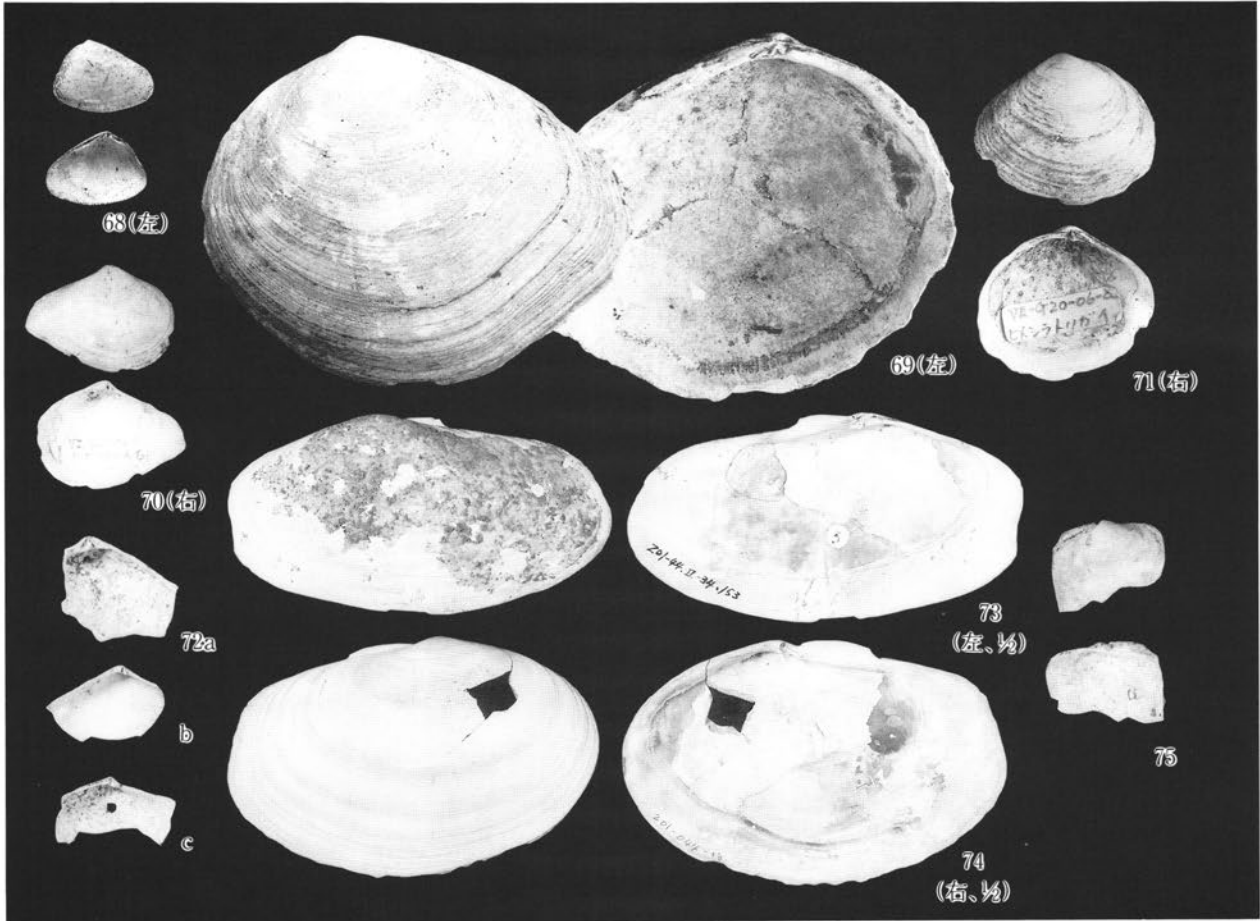
前後に長い形状はフジナミガイに似るが、分類学的には近くない。紫がかっていない

こと、殻頂部の弾帯受が大きいことで見分けられる。殻頂部の破片はシオフキガイ科に共通の形状であるが、殻の膨らみが弱いことで区別できる。なお、有吉北貝塚ではフジナミガイとともに「スリ貝」として加工されており、両種が同一視されていた可能性がある。

※シオフキガイ科の左右の識別

シオフキガイ科の多くは殻の形状からでは前後がわかりにくいので、左右の識別も難しい。ちょうつがいの部分でみると簡単である。

主歯(「人」という字のような部分)が向いている方が前である。左右は人間と同じで、後ろから見たときに右に来るのが右殻である。



フジノハナガイ科

68 VII-G19-01 フジノハナガイ

成体で1.5cmほどの小形の貝で、外洋の砂中に生息する。有吉北貝塚で1点発見したもののだが、何らかのルートで混入したものであろう。形状は各縁が直線的な三角形で区別しやすい。殻表は弱い布目状で、内面写真のように、腹縁が細かく刻まれる。

ニッコウガイ科

貝塚からはいくつかの種が出土するが、まとまっていることはない。以下の種も身が小さく、食用としての価値はほとんど期待できない。サクラガイ類は小さな類似種が多いので、多くはニッコウガイ科種不明としている。今回掲げた写真や図鑑の写真で種を判断するのは難しい。

69 VII-G20-01 サビシラトリガイ

腹縁全体は丸みがあり、後方が歪む。後背縁と腹縁の後方がやや直線的なので、後端が尖りぎみになっている。形状はシラトリガイモドキに似ているが、内面の外套線湾入がきわめて深いところから本種とした。

70 VII-G20-04 ユウシオガイ

後端がすぼまり、やや右側に反り返る。大きくなっても2.5cmの小形貝である。注記のテリザクラガイは誤り。

71 VII-G20-06 ヒメシラトリガイ？

白井大宮台貝塚で数点発見された。図鑑の写真との照合によって、ヒメシラトリガイとしたが、サビシラトリガイの幼貝の可能性があり、未確認である。

72 VII-G20-99 ニッコウガイ科種不明

写真を3点示す。今のところ種の同定は難しいと判断されたものである。

シオサザナミガイ科

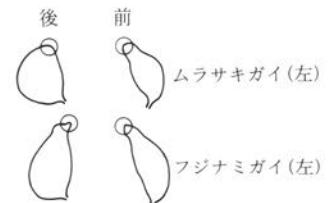
同じ *Soletellina* 属のムラサキガイとフジナミガイは、貝塚産のものでどちらも紫色を帯びていて、形状もよく似ている。なお、科の和名はアシガイ科、リュウキュウマスオガイ科など図鑑によって異なるが、『世界文化社』に従った。

73 VII-G22-01 ムラサキガイ

フジナミガイとよく似ている。本種は殻が薄く、長めに見える。しかし、個体差があり写真と見比べてどちらかに同定するのは難しい。貝塚産では閉殻筋(貝柱)痕の形状の差が信頼できそうである。

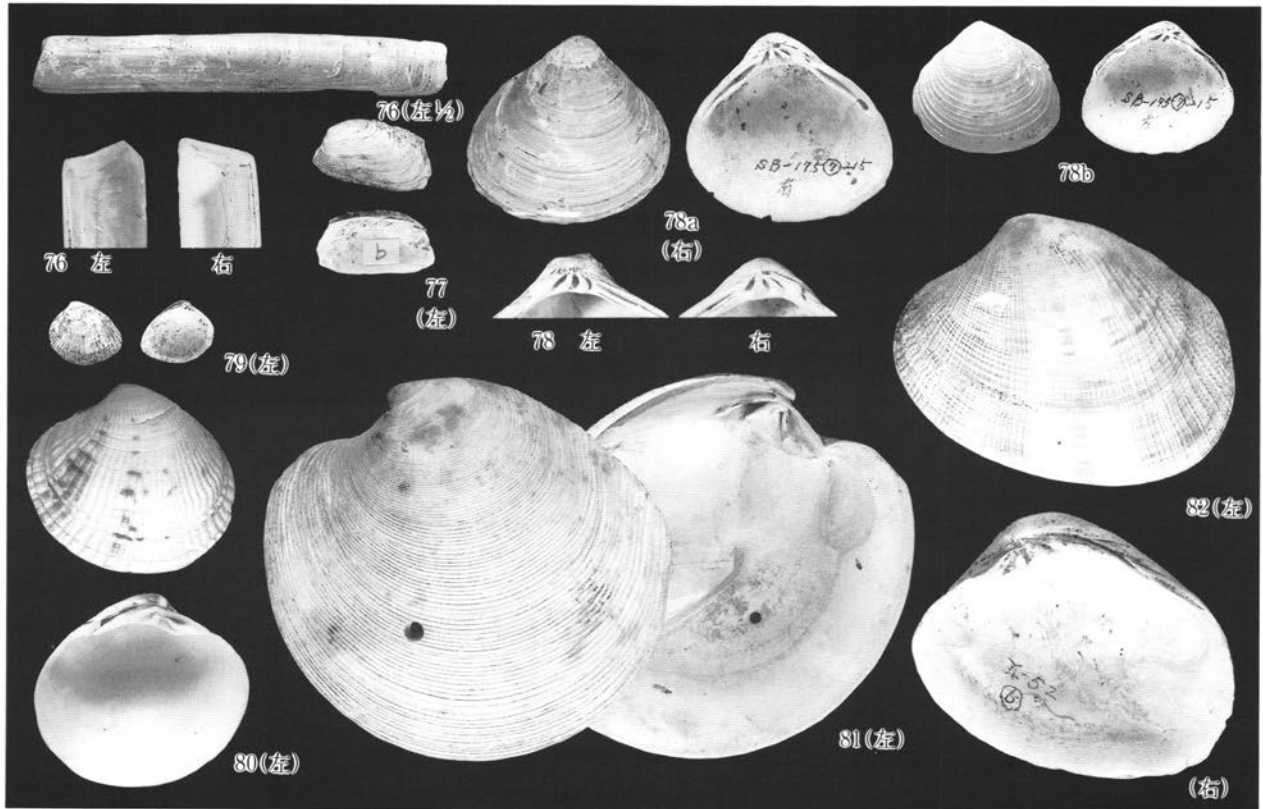
74 VII-G22-02 フジナミガイ

ムラサキガイに似る。殻全体が残っていれば、殻高が高く、腹縁が丸みを帯びることで見分けられるが、個体差がある。有吉北貝塚では「スリ貝」の例がある。



75 VII-G22-03 ハザクラガイ

『世界文化社』、『学研』には本種の掲載がなく、写真の標本は黒住氏によって同定された。透かしてみると『保育社』の「ハザクラ」と同様の放射状の彩色が見える。



マテガイ科

76 VII-G25-01 マテガイ

細長い形は独特であり、容易に同定できる。殻頂部の傾きの方向で左右を見分ける(写真)。右殻には突起がある。肉量が多く、うま味が強いので縄文人も好んだようである。たいてい本種のみを薄層を形成し、灰や焼土を伴うことがある。焼いて食べたのであろう。

フナガタガイ科

77 VII-G29-01 ウネナシトマヤガイ

河口の岩礁や礫に附着している。草刈六ノ台遺跡の縄文早期の層には小形の個体がまともに入っていった。マガキに附着していたのであろう。

シジミ科

78 VII-G32-01 ヤマトシジミ

マシジミとの区別は現世のものでも難しいので、「シジミ科」または「シジミ亜科」としておくのが無難なところである。しかし、県内の縄文貝塚では(多量に出土しているにもかかわらず)マシジミの確実な同定例が示されていないことから、不確実ながら本種としておきたい。ヤマトシジミは

縄文時代における最重要種のひとつなので、汽水産か淡水産かの判断を放棄しておくことはできない。

最近の研究では計測値から集団としてどちらが主体なのかを判断できる(高安他1984)とのことであり、今後貝塚標本でもマシジミが混じっているかどうか確認していくことが望まれる。ただし、マシジミとヤマトシジミの棲み分けが不完全という報告もある(藤原1982)。

マルスダレガイ科

79 VII-G34-01 ヒメカノコアサリ

殻長1cmに満たない小形種であり、内湾性の貝塚にわずかに混入している。『世界文化社』図鑑には記載がなく、やや似ているカノコアサリ、アデヤカカノコアサリが載っている。『学研』図鑑の「放射肋がとくに強い」「成長脈によって区切られたところは鱗状になっている」「放射肋は腹縁のほうでは二つに分かれている」という特徴は写真の標本に当てはまり、前記2種には当てはまらない。

80 VII-G34-07 オニアサリ

小石混じりの砂泥底に生息し、食用とな

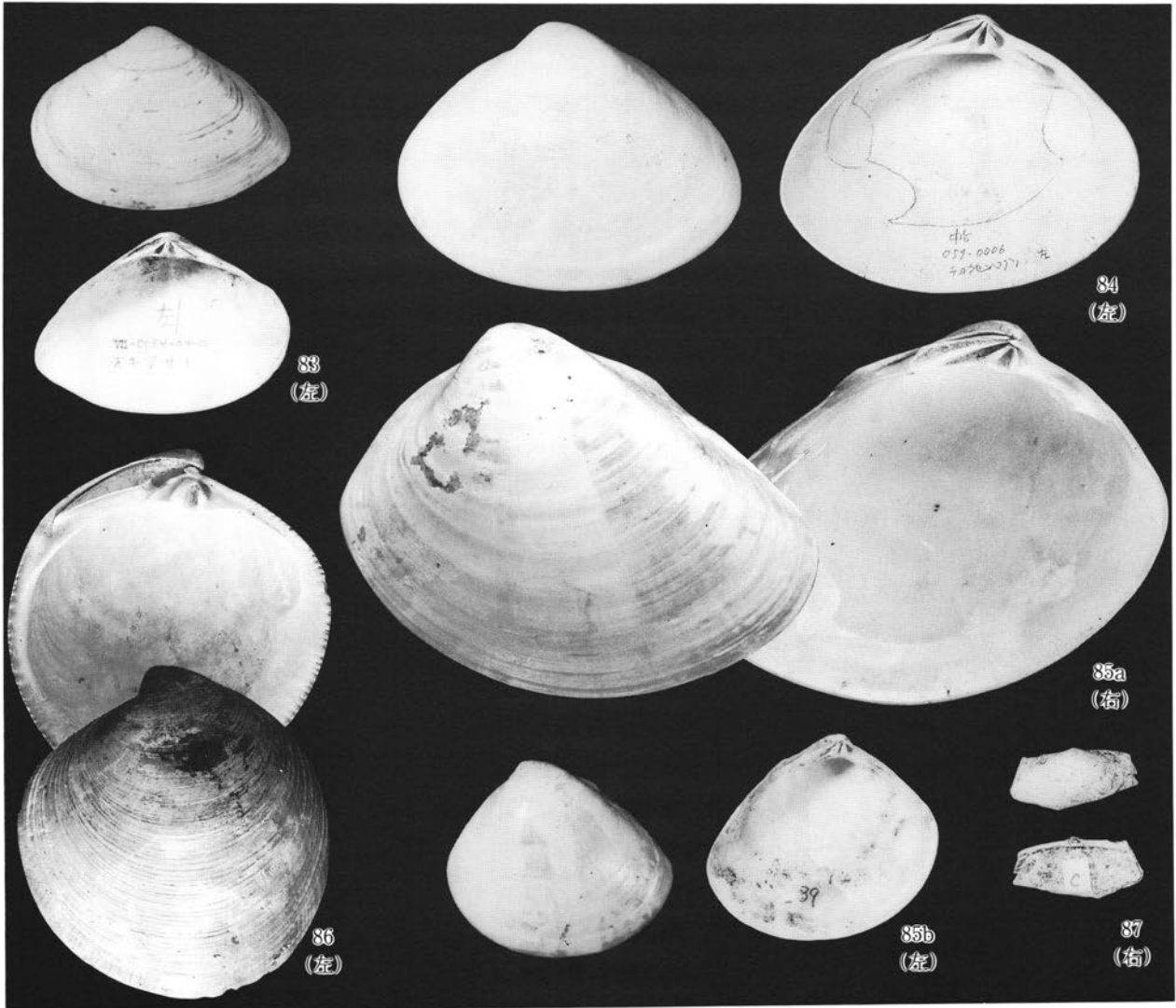
る。県内貝塚での検出例は少なく、小さな個体が混獲されたケースが多いと思われる。殻表はアサリに似るが、やや放射肋の方が強い。形状はアサリより丸みが強い。

81 VII-G34-03 カガミガイ

殻が厚く、強い成長肋(輪肋)をもつ。内湾の貝塚で普通に見られるが、「余り美味でない」とされ、県内の縄文貝塚ではまともな採取された例が少ない。貝刃として再利用される。独特の形状から同定は容易だが、外洋性のいくつかの貝塚で、本種によく似たヒナガイ、マルヒナガイが同定されている。これらとの区別の仕方は確認していないが、これまですべて本種としてきた。

82 VII-G34-03 アサリ

内湾性の貝塚でイボキサゴ・ハマグリに次ぐ重要種である。やや泥がちの干潟ではハマグリが少なくなると、アサリとシオフキの割合が高くなる。殻表は布目状で特徴的なので、小片でも同定は容易である。全体の形状は変異が大きい。



83 VII-G34-04 オキアサリ

東京湾東岸のうち海老川から汐田川水系の貝塚ではしばしば主体種となっている。

ハマグリに似ているが、腹縁が直線的で全体が三角形に近い点、また、殻の膨らみが弱いことから区別しやすい。同じフキアゲアサリ属のコタマガイはよく似ているが、潮間帯下部以下の深みに生息するので貝塚からはほとんど検出されない。

84 VII-G34-05 チョウセンハマグリ

九十九里側の外洋性貝塚ではダンベイキサゴと並ぶ主要種である。現在でも鹿島灘や九十九里産のものが多い。大発生に数年おきの周期があるので、内湾の主体種に比べると、やや不安定な食材であった可能性がある。ただし、縄文時代にも当てはまるかはまだ検討していない。

ハマグリに比べて腹縁が直線的であるが、

破片の識別は難しい。同じ大きさであれば、やや殻の厚いものが多い。

85 VII-G34-01 ハマグリ

東京湾岸に大型貝塚を形成したのはイボキサゴと本種である。長く東京湾を代表する味覚であったが、現在市場に出るのは外来種のシナハマグリか、外産産のチョウセンハマグリである。チョウセンハマグリとの区別は図鑑で見るほど容易ではない。普通は貝塚の立地からいずれかを推定しており、1個ずつ観察する必要はない。識別するときには腹縁の丸みが強いのが本種であるが、標本が手元にない心配である。

大きめの貝殻は貝器として再利用される。有吉北貝塚では貝刃の他に、縁辺に擦痕の付くものが多量に発見された。写真aは平均的な貝刃サイズ、bは食用サイズである。

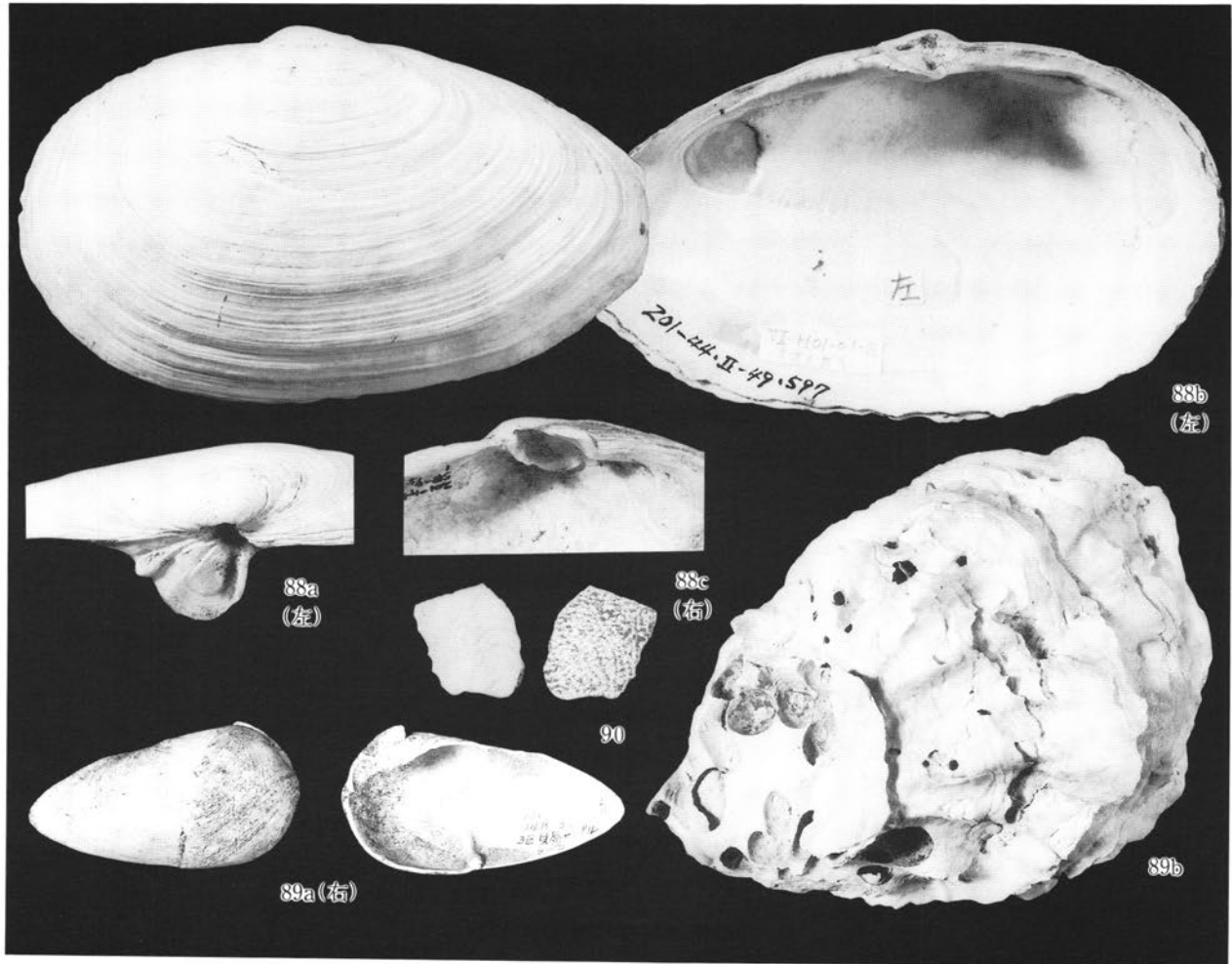
86 VII-G34-02 オキシジミ

内湾性貝塚でよく見られ、とくにマガキやハイガイ主体の貝層に混じっている。松島(松島1984)によるとマガキ・ウネナシトマガイなどとともに「湾奥干潟群集」に含まれている。食用だが、やや味が落ちるため、多産することは少ない。殻表には成長脈とともに弱い放射肋もあって、布目状になっている。全体の形状やこう歯が平坦な板状になっている点はカガミガイに似ているが、本種は殻が薄く、膨らみが強いことで容易に識別できる。

87 VII-G36-01 ハナグモリガイ

潮間帯の泥底に棲む。成長しても殻長2cm以下で食用にならない。東金野井貝塚で二枚貝綱種不明Aとしておいたが、その後黒住氏に同定していただいた。

PL. 14 (オオノガイ目)



オオノガイ目

オオノガイ科

88 VII-H01-01 オオノガイ

前後に長い形、密な成長脈などが特徴的である。主歯・側歯はなく、左殻の大きな弾帯受けが右殻の殻頂下に入り込む。内湾干潟に多く、現在でも水管が食用とされるが、泥中に深く穿孔して生息しているため、縄文貝塚ではまとめて採取された例は多くない。写真の有吉北貝塚標本は内面が外面以上に汚れており、加工されないまま道具として使われた形跡がある。

写真のように弾帯受けが大きく突き出た方が左殻である。

ニオガイ科

89 VII-H05-02 イシゴロモガイ

ニオガイ科の貝は殻表の模様が殻の途中で変わっていて独特である。ギザギザになった前域は岩などに穿孔するときに回転させてヤスリの役割をする。イシゴロモガイ

はニオガイ、カメガイなどに似ているが、前域と後域の境が明瞭でないことと、石灰質の「棲管」を作ることで区別できる。普通は泥岩などの堆積岩に穿孔して殻の周囲に「ころも」を纏う。上新宿貝塚出土標本でも棲管を伴っており、マガキに穿孔している(写真b)。サンプルによってはほとんどのマガキが無数の穿孔を受けている。マガキの殻の厚さ以上には大きくなれず、幼貝ばかりである。奥東京湾のような岩礁のない場所であらうじて生息していたようである。ただし、写真aは同じ流山市の三輪野山貝塚標本で、殻長38mmに成長している。何に穿孔したものであろうか。

現在はごく限られた海湾で知られており、おそらく縄文時代でも出土例の少ない希少種である。

Ⅶ 頭足綱

頭足綱(イカ・タコ類)は重い貝殻を棄てて遊泳動物へと進化した貝類である。

7-A コウイカ目

コウイカ科

90 VIII-A01-01 コウイカ

コウイカ科は大きな貝殻(イカの甲)を持っている。腹側の前半分にあたる「横線面」と呼ばれる部分の破片である。縄文人がイカ・タコ類を利用したかどうかは、証拠がほとんど残り得ないことから推測が難しい。コウイカは浅海に棲み、干潟にも入ってくるので利用された可能性がある。実際にコウイカの貝殻が出土した貝塚は少ない。しかし、まとまった例は聞かないので、流れ着いた殻を持ち込んだケースも多かったかもしれない。

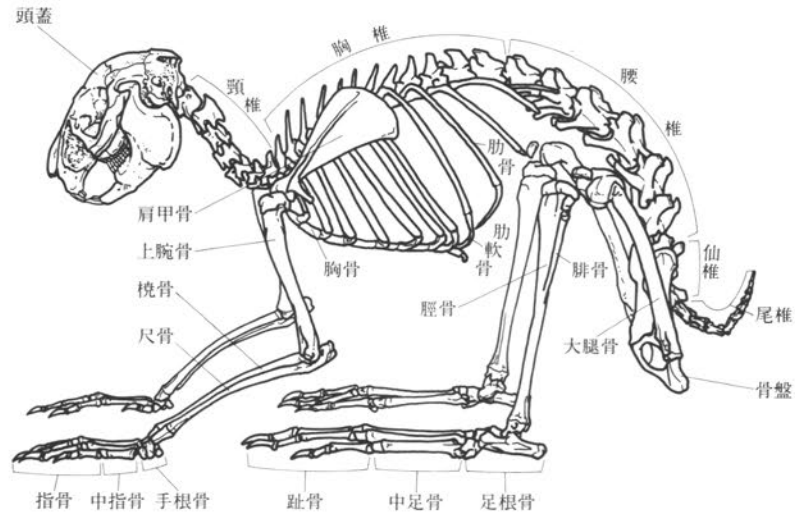
第7節 千葉県文化財センター所有骨格標本

当センターでは、昭和61年度から63年度に「貝塚の資料整備」事業の一環として骨格標本の整備を行った。まず昭和61年度に県教育庁文化課に依頼して哺乳動物弊死体を入手し、同年度から名倉剥製所、東洋近代美術研究所、京都科学の3社に標本製作を委託した。製作した標本は下表にある交連標本5体、分離標本17体の合計22体である。また、これに合わせてノウサギ、イタチ、タヌキ、ニホンジカの骨格図を作成したので掲載する。

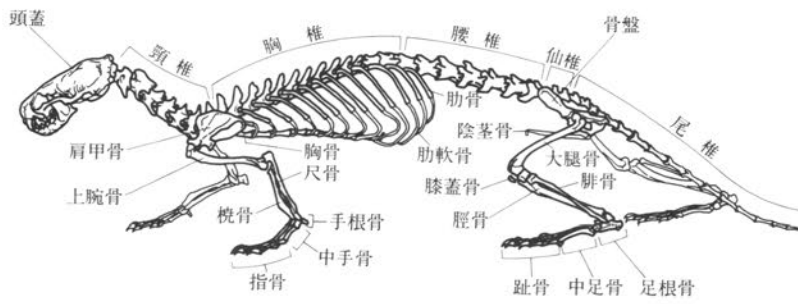
なお、当センターでは動物骨の同定・分析を外部に委託して実施しているため、その後系統的な骨格標本の整備を進めていない。ただし、中央調査事務所千葉調査室ではイノシシ、ノウサギ、タシギ、イヌ等の遺体を入手したので骨格分離標本を製作した。イノシシは国立歴史民俗学博物館西本豊弘氏のご厚意により譲り受けたものである。また、奈良国立文化財研究所松井章氏からタヌキの分離標本を寄贈していただいた。

標本No.	種名	年齢	性	採集地
CB01	交連標本 イタチ	成獣	オス	千葉県加茂川
CB02	交連標本 タヌキ	成獣	オス	千葉県加茂川
CB03	交連標本 ノウサギ	成獣	オス	千葉県清澄山
CB04	交連標本 タヌキ	成獣	オス	千葉県泉公園
CB05	分離標本 ニホンジカ	成獣	オス	千葉県天津小湊
CB06	分離標本 イタチ	成獣	オス	不明
CB07	分離標本 ニホンリス	成獣	オス	不明
CB08	分離標本 ノウサギ	成獣	オス	不明
CB09	分離標本 タヌキ	成獣	オス	不明
CB10	分離標本 キジ	成獣	オス	千葉県市川市大野
CB11	分離標本 アナグマ	成獣	オス	神奈川県相模湖
CB12	分離標本 イタチ	成獣	オス	笑福山
CB13	分離標本 スズカモ	成獣	オス	千葉県幕張沖
CB14	分離標本 クロカモ	成獣	オス	千葉県幕張沖
CB15	分離標本 カルガモ	成獣	オス	千葉県幕張沖
CB16	分離標本 タシギ	成獣	オス	不明
CB17	分離標本 アナグマ	成獣	オス	千葉県加茂川
CB18	分離標本 イノシシ	成獣	オス	京都府北桑田郡
CB19	分離標本 キツネ	成獣	オス	京都府北桑田郡
CB20	分離標本 ニホンリス	成獣	オス	千葉県加茂川
CB21	分離標本 キジ	成獣	オス	千葉県加茂川
CB22	交連標本 ニホンジカ	成獣	オス	千葉県天津小湊

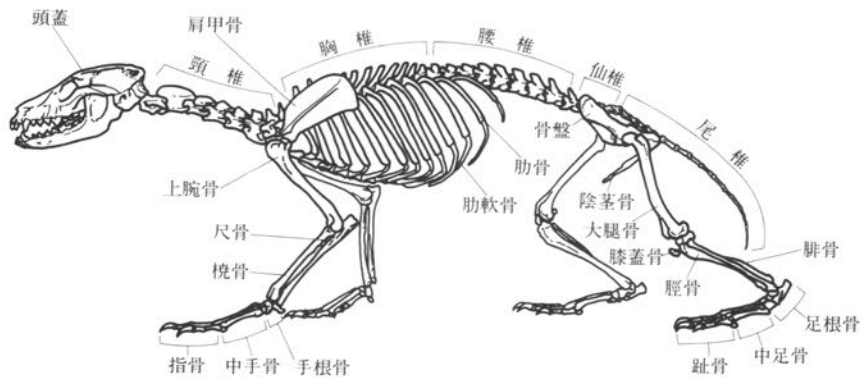
ノウサギ
全身



イタチ
全身

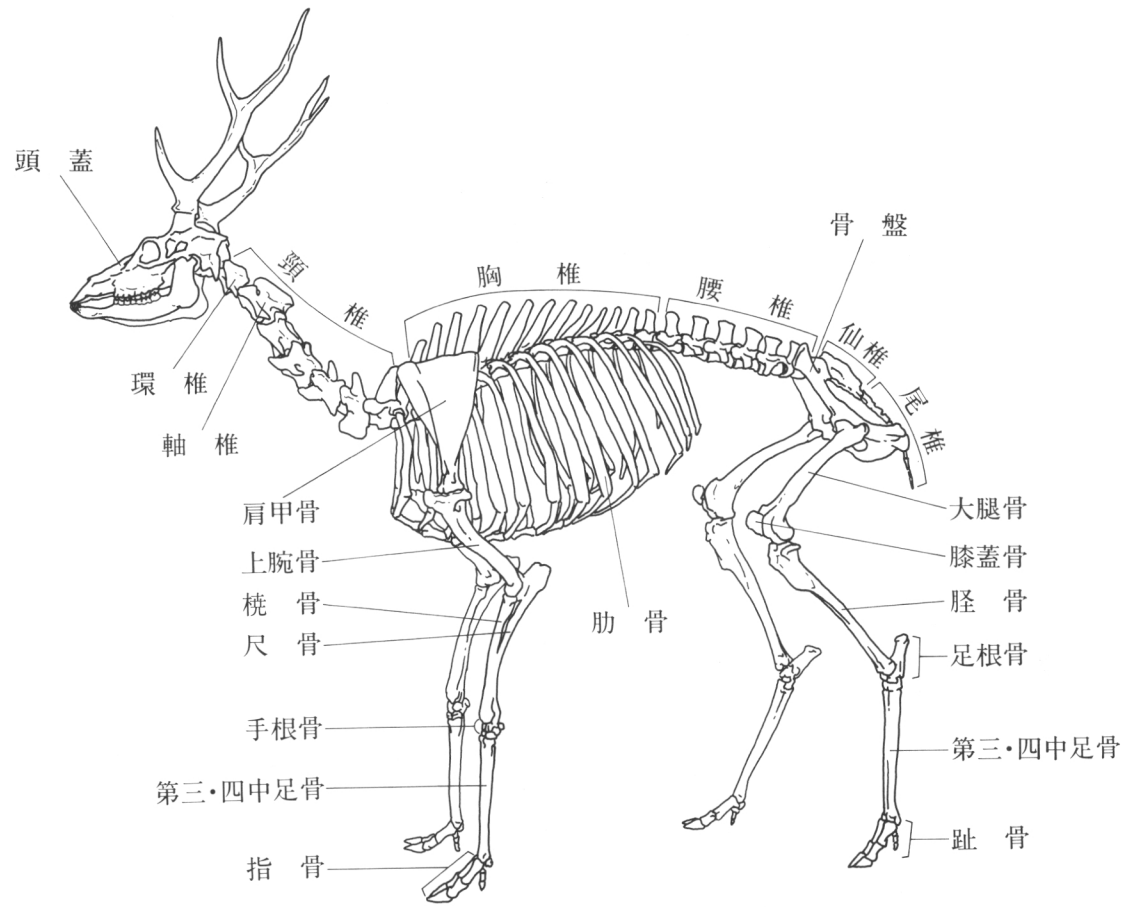


タヌキ
全身



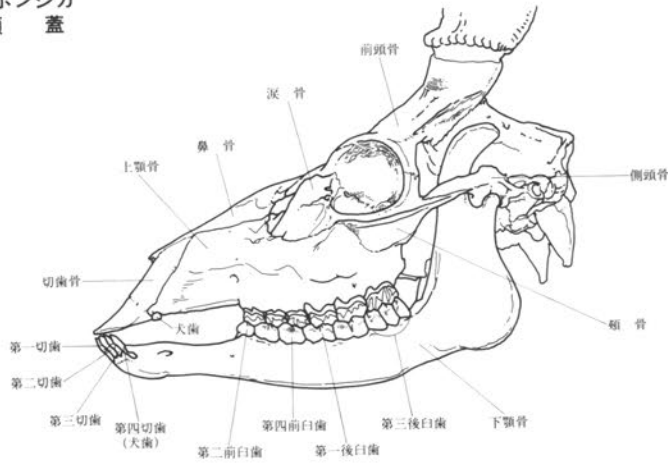
第91図 ノウサギ・イタチ・タヌキ骨格

ニホンジカ 全身

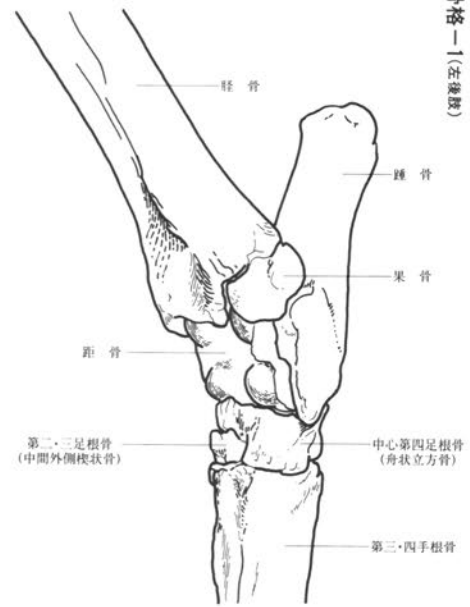


第92図 ニホンジカ全身骨格

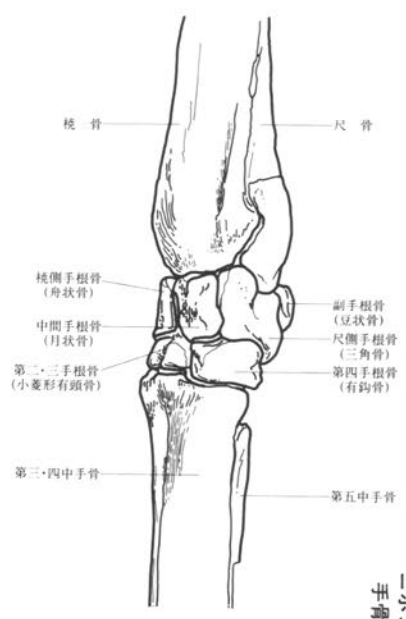
ニホンジカ
頭蓋



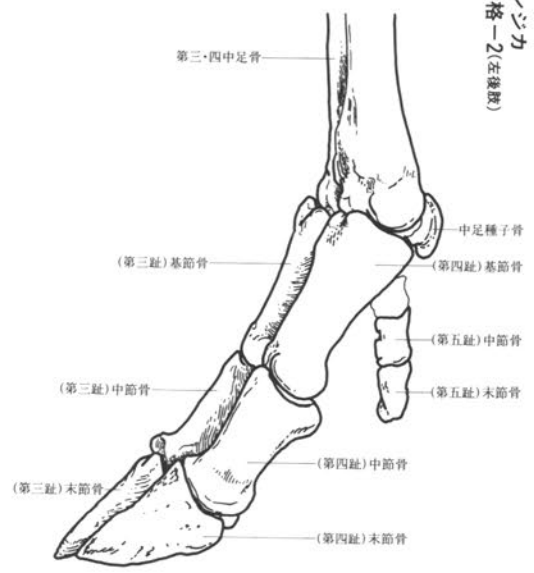
ニホンジカ
足骨格一(左後肢)



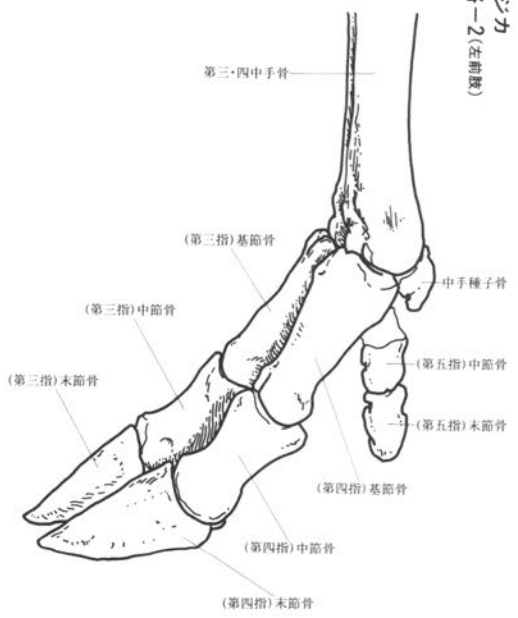
ニホンジカ
手骨格一(左前肢)



ニホンジカ
足骨格二(左後肢)



ニホンジカ
手骨格二(左前肢)



第93図 ニホンジカ部分骨格

千葉県文化財センター研究紀要19

平成11年3月30日 発行

発行者 財団法人 千葉県文化財センター
千葉県四街道市鹿渡809-2
電話 043 (422) 8811

印刷所 株式会社 弘文社
市川市市川南2-7-2
